明治廿六年四月廿四日發行

女學



表第百才七號

東京國民之社

女鑑第三十七號目次

女鑑

自恃むことなかれ

論說

女子の獨立と云ふ事に就きて……杉谷正隆

女子要言第二篇（九）……三輪田眞佐子

史談

瀧長愷の妻……杉谷正隆

忠女嶋……松野操雄

家政

看護法捷徑（十四）……三笠舍主人

料理法增補（序）……待月菴

家政雜事（一）……

學園

本邦女子文學畧傳（第一）……目黑和三郎

日本文典……杉谷正隆

女服考（第十五稿）……有住齊

漫錄

●七女七言　鳴立菴主人●古今集傳授一班　森馬太●女誡和解　内藤燦聚●懸居遺文　桝の舍●村田春海獄がたり　松野操雄●花のなごり　方丈庵主●婦女髮樣（圖入）　井上賴文●橘守部の長歌　おゝま

文林

こばれ梅（其一）……渡部乙羽

歌　近衛忠凞●東久世通禧●鍋島直大●前田利嗣●高崎正風●前田利鬯●黑川眞賴●小出粲●坂正臣●植松有經●内藤存守●中島宜門●林甕臣●上地信光●森馬太●佐々豐水●津々良一如●鍋島榮子●前田朗子●小池道子●松平健子●田邊龍子●鶴久予●中島歌子●高橋直子●藤井行麿

文　船路の記（承前）……故人藪氏

雜報

殘りの花●茶洗ふ女●悟りたる女●おことわり

敎の庭

歌文　數十首

●口畫……中江とき子

●挿畫……武内桂舟

瀧長愷の妻



女鑑

自恃むことなかれ

従順は、婦女子たるべき者の、常に離るべからざる美徳なり。而して、古昔、女子教育、の未、今日の如くならざる時にありては、此の美徳を具へたる女子、上下の間に、いと多く、もし、之を欠く時は、女子の本性を失へるものとして、大に、世の爲に擯斥せられたり。然るに、近時、我が國、泰西の文物を輸入し、女子教育の如きも、多くは、範を、彼に取り、是の種の教育を受けたるものは、古の婦女子を以て、無氣力にして、卑屈に安むじ、徒に、男子の使役物となり、以て、自、天賦の權利を傷へるものとなし、男女同權の說を立て、女權伸張の論を唱へ、

男子と相比びて、世に立たむことを希ひ、古有從順の婦德は、遂に、漸消滅に歸せむとするに至れり。

それ、男女同權、女權伸張等の說の、大なる誤にして、從順は、婦德の第一なること、吾人の、屢唱導する所なり。蓋し、從順は女子自然の本性なり。家にありては、父母に從ひ、人に適きては、夫に從ひ、夫死しては子に從ふ、是、即、女子三從の道にして、女子たるべきものは、終生この道を離るべからざるなり。もし、それ、自恣にして、父母の命令に從はず、同等の權利ありとして、よく、その夫に奉事せず、親たる威權を負みて、その子を壓抑するときは、その家、決して、平和を保つことを能はずして、風波、常に絕ゆることなく、人生の最大幸福たる一家團欒の樂を享くることを能はざるべし。

而して、この從順の德を養ひて、女子の本性を失はざらむとせば、まづ、その、自恃む心を去るべし。それ、女子が、從順の德を失ひて、暴慢の行を恣にするに至るは、その原因、誠に種々あるべしといへども、多くは、其の身の學問才能を恃むによるなり。吾人、試に、是等女子の心中を察するに、吾は、何々の學科を修め得たり。吾は、よく、文章を作り、詩歌を賦す。吾は何々の技藝を習ひ得たり。吾は、音樂を善くし、美術手藝を善くす。吾が學問は、父母の蔭によらずして、その身の獨立を圖るに足り、吾が技藝は、夫の力を藉らずして、その身の生計を營むに足ると。之を、心に生じて、之を、行にあらはし、甚しきは、公然、之を口にして顧みざるに至る。是實に、從順の美德の、自然に、女子の身を離れむとする最大原因たらずんばあらず。故に、この德を養ひて、女子の本性を失は

ざらむとせは、たとひ、その身に、いかなる學問藝能ありとも、決して、之を恃むことなかるべし。

それ、女子の學問藝能を修むるは、亦、その父母と夫とを助くるが爲にして即、之に事ふる所以の道に外ならず。之に抗爭して、其の優劣を較し、之に服從せずして、その獨立を圖らむが爲にはあらさるなり。恃みて驕敖なるべからず。而して、女子の恃むべき所のものは、全く、此等の外にあり。家にある時は、父母をは、此上なき天と恃み、人に嫁ぎては、夫を二つなき天と恃み、恃む所に從ひ、從ふ所を恃むべし。されは、女子の恃む所は、已にあらずして、人にあり、父母と夫とにありて、我が身の學問技藝にあらざるなり。

さるに、今の世の、教育受けし女子等は、みづから恃みて、自恣にし、その恃

むべきを恃まずして、その從ふべきに從はず。あはれ、教育は、果して、女子なは無用なるか。はた、教育の要旨を誤りしによれるにか。

論説

女子の獨立と云ふ事に就きて

杉谷正隆

獨立と云ふ事は、字の如く、他の人の力を借らず、外に向きて依賴する心なく、自世に立ちて行くを云ふ。故に、國にまれ人にまれ、此の獨立と云ふ事なければ、即人の奴隷となりて、我が國ながら我が國を、心のまゝに保つ事能はず、みづから我が身を、心のまゝにもてなす事能はずして、忍ぶべからざる耻をもかき、堪ふべからざる辱をも蒙りて、人と生れし甲斐もなく、世にありふる樂もなかる

べし。而して、國の獨立は、實に人の獨立にあり。世にありとあらゆる人にして、他の力を借らず、人に依賴する事なくして、各其の身分に應じ、獨立して動く事なくば、其の國おのづから獨立するに至る。されば男子にまれ女子にまれ、獨立の二字は、束の間も忘るべからざることなり。

さらぬだに、我が國は、　皇祖　皇宗、武を以て基を建て給ひしことなれば、上下共に獨立の氣象に富み、負けじ魂いと盛なるに、まして今の　大君の、千代田の宮に天の下知食しより、四方の海荒き浪立たず、八つの衢亂るゝ塵も起らず、　皇化深山の奥に及び、文教卒土の濱に遍く、國步日々に進み、人智月に開け、上は雲の上人より、下はしづ山賤に至るまで、學の海をあさり、文の林をわけざる者なきに至りぬれば、人たる道を知り、物の理を悟り得ぬ者なし。され

は獨立と云ふことは、國にも人にも、一日も欠くべからざるものなることも、亦明に知らざる者なきに至れり。是によりて、男子も女子も、其の縣々の學校に入り、或は父母の膝下を離れ、數百金の資を擲ちて、千里を遠しとせずして、笈を負ひ都に來り、雪を積み螢を集め、孜々刻苦して、學事を脩め智識を研き、皆其の獨立の道を立てむことを務めり。あはれ、世の人々にして、誰も此の如き精神ならんには、我が國家の確乎不拔、富岳の如くならんこと、期して待つべきなり。

然れども、此に一つの不審あり。男子の獨立と、女子の獨立とは、其の言同じくして、其の意背馳せることなからむか。若、背馳せることなからむには、此の上もなき事なれども、予は大に疑を此の間に存せざるを得ず。何となれば、男子の

いはゆる獨立は、終身無妻の意を含ませれども、女子のいはゆる獨立は、終身無夫の意を蓄ふるが如し。今試に、男子に其の志を問へば、學成りし後は、獨立の事業をなして以て、子孫萬世に傳へむとすと答ふ。是則夫婦相提携して以て、其の功を爲さむと欲する意なり。又、試に女子に其の志を問へば、曰はく。學成りし後は、其の脩め得たる事業に從事して以て獨立せむとす。彼の男子の爲に、束縛せられ使役せらるゝが如きは、妾豈敢てせむやと。以て其の終身夫を持たぬ決心なる事を見るべし。されば、男子の獨立と女子の獨立とは、相背馳せること明なり。夫婦相提携する男子の獨立是なるか。終身無夫なる女子の獨立非なるか。請ふ其の是非を論じて、以て世の父兄女子に質さむ。

夫男子は陽なり。故に乾剛なり。女子は陰なり。故に坤柔なり。天地の間、陰陽の

氣相待ちて、始めて萬物生育す。故に萬物皆陰陽あらざるはなし。假令ば天の如き、日の如き、火の如きは陽なり。地の如き、月の如き、夜の如き、水の如きは陰なり。故に天地相應じ、日月相照し、晝夜相待ち、水火相對して、而して萬物生育する事を得。何となれば、陽は物を生じ、陰は物を育するものなればなり。若、天日晝火の如き陽のみならむか。如何でか、萬物育せむ。又地月夜水の如き陰のみならむか。如何でか、萬物生せむ。人も亦天地の間に生捿す。如何ぞ天地の理に異ならむ。男子のみならむか。何を以て子孫を育せむ。女子のみならむか。何を以て孫子を生せむ。陰陽ありて萬物あるが如く、男女ありて社會あり。故に男女相配して始めて完全の人となれりと云ふべし。男女各一人にては、未完全なる人とは云ふべからず。されば、男子の獨立は、婦妻ありてこそ眞の獨立とは云ふべけ

れ。女子の獨立も亦、男夫ありて後、眞の獨立とは云ふべきなり。是によりて見れば、假令博學宏才、一世の冠たりと雖も、終身無妻の男子は、眞の獨立を爲せる者にあらず。又假令勤勉怠ることなく、千萬の金を積むとも、終身無夫なる女子は、眞の獨立を爲せる者にあらざるなり。古人曰はく、修身齊家と。蓋、先我が身を修め、而して男子は妻を娶り、女子は夫に嫁して以て、家を整ふるを云ふなり。是ぞ一人前の男子となり女子となりて、社會の表面に立つ始なる。彼の獨身にして世を終るが如きは、他の力を借らず人に依頼せずとも、眞の獨立には非ず、片輪の獨立なり。否既に片輪なり。如何でか獨立の名を附することを得む。

今日の女子は、天下皆然りと云ふには非ざれども、少しく學あり識ある者は、皆此の片輪の獨立を爲さむと試むる者多きが如し。否此の片輪の獨立を以て、眞の

獨立と誤想し、揚々く得々くたる者を都下に於ては常に見る。必ず地方にも多かるべし。何ぞ其の誤れることの甚しき。此の如き女子は、返りて學なく識なき女子にも劣れりと云ふべきなり。父母の膝下を去りて孝養を欠き、數百金を擲ちて家財を耗し、螢雪の窓に頭腦を苦しめ、而して得る所は、唯片輪の獨立のみ。然のみならず、既に此の片輪の獨立を得るに至れは、己のみ痛く思ひ上りて、物いはんにも、打振舞はんにも、驕傲なる事のみ多くなりもて行けは、人には言ひ消され、世には擯斥せられて、あらぬ樣にぞさすらふめる。此の如き片輪の女子のみ多くなりたらんには、國家を富岳の安きに置くことの難きのみならず、返りて危邦に陷しいれんのみ。あはれ世の女子をもてる父兄等よ。あはれ學に志す女子等よ。片輪の獨立を以て、眞の獨立と混淆し、其の方針を誤ること勿れ。

女子要言　第二篇(九)

三輪田眞佐子

然るに世間を見よ。眞に母たる道を行ふ女子、幾人かある。恰も曉天に立ちて、星光を拾ふが如し。否、唯に其の例を多く見ざるのみならず、其の子を愛するや、大槪禽犢の愛を以てす。故に利害を考へずして、過分の食物を與へ、小兒をして、脾肝病たらしめ、良人に陰して、呉服商を招き、奢侈の風に倣はしめ、甚だしきは、良人の不在に、其の兒子の學校を休ませ、演劇に伴ふ等は、滔々たる女子の恒なり。思ふに、愛情強きは、女子の天性なり。否長所なり。然れども、愛する道を以てせざれば、其の愛や愛とならず。孔夫子曰、愛㆑之能勿㆑勞乎、忠焉能勿㆑誨乎。且亦古人曰、母不㆑取㆓其慈㆒而、取㆓其教㆒、溺㆑愛姑息、教所㆑難也。と深意ある言と

云ふべし。
論じて茲に至れば、母たるものは、如何なる標準を以て、如何なる希望を以て、其の兒を育つべきかの疑問を試むる時ならん。夫れ母たるものは、其の女を産まば、衣通姫の如く、男を生まば、深草少將の如く、只美人ならんことを祈るべからず。行くには玉輿に乘り、食ふには象箸を以てする如き、單に贅澤の生涯をなせよと願ふべからず。然るに過半の女子は、其の子を懷き、顏色の白きを悅び、勤めて衣服を立派にするを樂み、其の餘は、空々寂々たるものなり。亦思はさるの甚はだしきと云ふべし。茲に於いて、尙其の標準、及び希望に就き、一言するの止むを得さるなり。

兒を育つるの標準希望は、其の子を聖賢、少くとも名士達女たらしめんと定むべ

し。從うて禮讓を敎へ、道義を責め、利害を明にし、賴宣の乳母となり、曹大家となり、花の朝も、月の夕も、兒育に汲々たれ。然らずんば、其の子放蕩の者となり、不孝の人とならん。其の希望も國民の公義を全くするに足るものたらしめんとせよ。彼の其の子の兵役を免れしめんとて、神佛に祈願を懸くる如き母は、猛虎の魯國に當り、猾智の英國に對し、此の東洋の大帝國の威赫を知らしむる能はず。其の子の虛言を怜悧と譽め、不正を賢才と唱ふる如き母は、此の將に、腐敗せんとする風儀道德を挽回する能はず。若時を同じうせば、嚴延年の母の笑を免れず。亦一家を興こすに足る人たらしめんとせよ。其の祖先墳墓の地、他人の牛馬の嘶く處となり、其の父、油汗を脊にして、建築せし土藏の、其の壁未だ乾かざるに、已に、顏だも知らぬ人の住む宅となる等は、主として、其の子の幼時、若

樣、孃樣の尊稱のみに滿足して、學問は勿論、世帶の何たるを辨へず、無我無心の間に、生長せし結果なり。而して其の原因をなしゝものは、其の母と云はざるを得ず。吁、公父文伯の母に耻づるなき乎。

其の他、其の子の成人の後は、學者たるか、百姓たるか、將商人たらしめんとするか等、各其の未來の立世の職務に付き、良人と相謀り、豫め其の心算を以て育つべし。是大に、其の子の立身を助くるものなり。蘇軾、蘇轍の母は、其の例なり。

終に臨んで、繼母の道を附記せん。繼母なるものは、血族上より、及び宗教主義より論ぜば、眞の母たるものにあらずと雖も、可憐の子は、親と呼び、無邪氣の女は、母と慕ひ、而して杖と恃み、力と思ひ、繼母も亦、子として育つる以上は、

既に母たる實を行ふものなり。道理に於いても、良人に對しても、國体に照らしても、眞の母と撰らぶ處なければ、一般母道に准じて可なりと信ず。然るに、其の實際を見るに、繼母は、前子を仇讐視し、物の言ひ樣、食事の作法に至るまで、舌を焦して惡むなり。而して此等の事實、今世に初まりしにあらずして、昔日よりして然り。正史を繙けよ。保元大乱の原因は何ぞ。稗史を開けよ。中將姫の憂苦は何ぞ。其の他、舜母の如きもの少からず。茲に、其の惡む所以を探れば、第一、家財を前子に與ふるを惜しみ、第二、前子の我が子に勝るを羨み、第三、先妻に對する嫉妬の念と、我が子を偏愛する私欲の心とに過ぎず。嗚呼、何ぞ其の胸中の卑劣にして汚れたる。吾人は、他人に向ふも、道理のある所、從ふの義務あり。況んや、假初にも我が子と名けつゝ、此の道理と比較せば、風前の塵に

も類する家財に、不義の望を圖し、以て一家の波瀾を起こし、后來に悪評を殘すも、尚其の念を絶つ能はざる乎。一般野心邪推は、教育なき女子の欠点なり。速かに洗除すべし。元來繼母の前子に對する道は、慈愛なるべし。信實なるべし。公平なるべし。果して斯の如くせば、靈智ある人間の恒として、必ず實子の如く孝養すべし。且前子には、義理あるを知らさるべからず。齊の義繼母、二子あり。兄は前子にして、弟は實子なり。嘗て二子、共に寃罪を得て、何れか犯者なるやの糺問を受くる時に、此の母泣いて而して曰はく、其の少者を殺せと。獄吏曰はく、何の謂ぞや。母曰はく、少者は妾が子なり、長者は前妻の子なり云々。是れ千載の下、尚人をして涙を揮はしむるに足る。焉ぞ前子をして、感泣せしめさるの理あらんや。思ふに人は、義を以て立ち、理を以て合ひ、愛を以て親むものな

り。此の三者の次第を、繼母の腦裏に刻せば、世俗の所謂、繼母たる苦痛を免れ、郷黨の稱譽を得る難からず。亦快ならずや。

史談

瀧長愷の妻の傳

杉谷正隆

器は、形の美しきが世に持てはやされ、女は姿の艶かなるが人に愛ではやさる。而して、其の意の面白しきと、其の心の善きとを取るもの少し。是古より今に至るまで、心あるもの丶憂とする所なり。形ばかり如何に美しく、金銀もて裝ふとも、其の意の面白からざらむには、何ぞもてはやすに足らむ。姿ばかり如何に艶かに、錦繡もて飾りたりとも、其の心の惡しからむには、何ぞ亦取るに足らむ。形姿のみを賞で丶、其の心を顧り見ぬものは、極めて愚なるものなり。さるに、世にいさ丶か形なよびかに、姿あてやかなる女は、愚なる人の愛ではやすまに〳〵、萬ないがしろに振舞ひて、みづから我は顏に思ひ上りたるも多かめり。さる女は此の

傳を、よく讀みよく味ひて、みづから省る所あるべきなり
長門國萩の藩士某の家に女子ありけり。能く父母につかへ、心ばへいさぎよくけだかく、學の道さへたど／＼しからず。然れども、其の容貌いと／＼醜かりけれど、春すぎ夏長くるに至るまでも、云ひよる者なく、娶らむとする人もなし。父母はいたく之を憂へ、其の寡にして一生を終らむことを憫み、如何にもして、其の配偶を得てしがなと心を碎き、ある時は、媒人さへするものあらば、假令貧しく賤しき處なりとも、許して嫁がしめむとまでさへぞ云ひいでぬる。然れど、女は思ふ心やありけむ。父母の前をとかくつくろひて、自ら配偶を擇び、妄りに嫁ぐことをせず。世のつね、人に語りて云ひけるやう、今の世の人は、共に語るに足るものなし。ひとり瀧鶴臺先生の如きは、まれにも見ざる人物なり。女と生れたらむものは、かゝる人をこそなど云ひけり。鶴臺とは、長愷の號なり。文の林深く分け入り、學の海遠くあさり、徳高く行正しく、賢き名は四方にきこえ、めでたき譽は國内にとゞろき、高きも賤しきも、敬ひ尊みなど、世にすぐれたる人なりけれど、之を見る人聞く人ごとに、其の身におはぬ望におどろき、容貌にも似ず思ひあがりたる女かなと、嘲

り笑ひて、其の後は、絶ゑて媒人せむと云ひよる人もなかりき。
燕雀は鴻鵠の志を知る事能はず、賢き人の志は、賢き人に非ざれば知らざるなり。
鶴臺は此のよしを聞きて、心に思へるやう、昔は孔明醜婦をえらびて娶りたりとか。心知らぬ美しき女を娶りて、臍を噬まむより、かゝる己を知れるものをこそとて、遂に娶りて妻とせり。女夫に事ふること敬しく、柔順にして周緻なり。幾くもなくして、家よく治り、思ひしにも過ぎて賢かりければ、鶴臺も亦こよなきものに愛できこゑ、よろづ妻に計りて物せしかば、其の助をゑしことも尠からざりき。又まれ人など來りて、國の政の可否を論ひ、或は忌み憚るべき話などある時は、徐に之を諫めなどして、事の大小となく、常に心を用ゐて、夫を助けたり。かくて數年の間、一日もかはる事なかりければ、鶴臺も内に顧る憂なくして、其の心安かりき。或る日、妻何事をかせむとする時、誤りて袖の中より赤き絲もて毬の如くせしものを鶴臺の前に落し、少しく羞づる色あり。鶴臺あやしみて、其の故を問ふに、妻袖かき合せて答ふるやう、妾至りて愚なる性なれば、常に過多し、故に其の過を少なくせむことを思ひ、赤と白との二つの毬を造りて、袖の中におき、若し惡念のおこる時は、赤

絲をそへて結び、善念の萌す時は、白絲を加へて結びけるに、初一二年のほどは、赤き方いとゞ大きくなりまさりつれど、良人の敎へ導をうくるまに／＼、常に自省みて、いよゝ謹み守りしかど、やゞ／＼に白き毬大きくなりて、今は同じさまになりぬ。これ全く良人の善き行に化せられし賜なり。されど、未白の赤よりまさらざらんこそ、かへす／＼口をしく恥かしきことなれとて、やがてかたへの袖より一つの白き毬を取りいでゝ示しければ、鶴臺も、大に其の志の厚く、たしなみの深きに感じ、夫より後は、ます／＼自省みて、其の德を脩めたりしかど、めでたき名、いよゝ世に輝きわたりしとぞ。

古より、妻の善し惡しによりて、愛たき名をのこし、憂き名をながしゝ男子、いと多きことは、歴史上に明かなれど、今更いふまでもなきことながら、今の世、人も我も、見聞くものゝ中にも尠なからず。始は、令き聞ゑありし人も、妻を迎へて後は、世にそしられ人に云ひ消たるゝ者あり。又人にも數まへられざりしものも、妻を娶りて後、令き聲ある人あり。すべて、夫婦は一體分身とも云ふべきものなれど、妻の善し惡しは、おのづから夫の身にも及ぶなり。世の女子等は、鶴臺の妻の心を

心とえたらんには、必しも容貌の美醜には依らざるべし。

忠女福

松野操雄

ふくは、甲斐國都留郡忍草村の里長五郎右衛門の雇人某が妻なり、不幸にして、蚤く夫を喪ひしも、再び他に嫁がで、そが忘れがたみ六右衛門といふを育てあげつゝ、よくその雇主につかへて、ことにまめ／＼しかりき、かくて五郎右衛門、癩病に罹りてたつこと能はざる身となり、加之その主婦も、嬰兒を遺して身まかりしかど、さしもに豊なりし生計も、頓におとろへて、所有の田畑も、みな負債の方にあて、遂にはその日の烟もたてかぬるほどに至りけれど、召し使ひし多くの奴婢どもゝ、おもひ／＼に暇をとりて、主家を顧みるものとては、たえてなかりしを、ふくは、いかにもして、主家をたてんものと思ひ定め、未だ幼き六右衛門をも、他家につかへしめ、おのれひとりとゞまりて、主家の爲に心を竭し力を致し、五郎右衛門の病をいたはり、その幼兒を鞠育みて、いさゝかも怠ることなく、夜はひそかに、産土神の御社に詣でゝ、雇主の病の愈えんことをいのり、あるひは溪川に禊して、おのれ

が身にかへんことを願ふなど、實にいたらぬ隈なく、暑さ寒さもつゆ厭はで、精神をつくして懇禱し、心力をいたして療養せしかども、そのしるしなく、いつ愈ゆべしとも見えず、はたその家財をも、藥資食料にうり盡くして、ふく一人のはたらきにては、雇主親子をやしなふことあたはざるに至れり、茲に於いて、ふくは、五郎右衛門を背負ひ、幼主の手をとり、同國南八代郡末木村といふに、六右衛門が、わづかの家をもちてありけるを尋ねゆき、そこにとゞまりて、母子とも〴〵に療養することゝなしき、かくてふくは、晝は人に雇はれて鋤鍬をとり、夜は主人の病牀に侍して、これを看護し、夏は夜もすがら團扇をとりて蚊をやらひ、冬は身をもつてその手足をあたゝめ、外にいでゝ、衣食をうることあれば、かならずまづこれを主人親子にすゝめて、わが身にはいさゝかもつけざりき、又幼主には、貧しき中より、紙筆を購ひとゝのへ、文字書くわざを習はせ、書籍を人に借りもとめて、これをよましめなど、その辛苦のほど、いたらざることなし。かゝりければ、その子六右衛門夫婦も、心を協はせて母を助け、舊主を介抱しけれど、郷黨隣里の人々、ふくが忠貞を賞め、六右衛門夫婦が孝義をたゝへぬはなかりき、ところの代官武島某、そ

の事を傳へきゝ、大に之を嘉し、みづからも金數をあたへて、これをはげまし、又そのおもむきを、具に幕府に上申しければ、やがてふくには、白金二十枚その子六右衛門には、全じく十枚を下し與へて、その忠孝を賞でられき、これ實に、天明八年二月ごろばかりの事なりきとぞ。

あはれ、世の孃等、よみ來りていかにか思ひ給ふぞ、われ筆つたなくして、ふくが忠貞の行も、あはれかきおとしゝ所多かめれど、其の一班は知り得られしなるべし、こはこれ、敎育洽からざりし百餘年のむかし、山また山の甲斐の僻鄕に於いてばかり、今大都のたゞ中に在りて、文明の敎育をうけ、開化の新智識を得たりと、自らも許し、他もばかり思へる婦女子中、ふくが如き忠貞のもの、果して幾人かある、

家政

看護法捷徑（十四）

三笠舍主人

（十七）病者尿通

一尿は、病症を卜知するに、最も大切のものにて、恰も病氣の增減の度を指示す寒暖計の如きものなり、其委しき撿査は、醫士に非ざれば爲し能はぬ事なれども、一通其分量、色澤、等の如何を知悉するは、看護上肝要の事なり、

二尋常の尿は、透明淡黃色、若くは無色、（飲料を多く用ゐるに從ひて、益稀淡と爲る、）にして、新に排泄したるものは、全く無臭なるか、或は稍肉汁に似たる臭を帶るも、少しく時を經る時は、一種の惡臭を放つ、但、新らしき尿にても、食物又は藥の爲に、種々の臭氣を放つ事有、

健康の大人二十四時の尿量は、大抵、壹舛二三合を中等とす、

三病氣に罹る時は、尿の分量、及色を變ず、（病に仍りて、猶其性質をも變ずるも、是は醫士に非ざれば、知る事能はず、）多くの熱性病、其外總ての急性の病、下痢、若くは發汗の後は、尿は褐色、若くは緋色と爲りて、其量著しく減少す、又腎臓、膀胱、若くは尿道、等に出血ある時は、赤色、褐色、或は黑色と爲る事有、又病症に由ては、甚く濁る事有、或は全く尿通なきもの有、又病に依りては、非常に多量を漏すもの有、種々にして一樣ならず、

四看護の任に當るものは、醫士の命なきも、常に病者の尿量、色澤、幷其度數、等を記憶し置て、醫士診斷の節、申告すべし、若特更に、尿の檢査を命せられたる時は、一晝夜間に漏らず尿を、悉く貯へ置きて、(或は早朝始めて通ずる尿を、別に硝子の壜に貯へ置て)醫士に送りて檢査を乞ふべし、

五重病者尿意を催す時は、注意して扶持し、尿通せしむべし、尿失禁するものには、長き頸ある硝子製の溺器を、適宜に綿にて包みて、股間に挿入し置くべし、痲痺性の病者などにありては、尿通全く止むもの有、能く尿通の有無を檢して、醫士に報告すべし、

六溺器は、使用の後直に洗滌すべし、通常、熱湯を灑ぎて後に乾すを良とす、又病に依りては、消毒藥を用ゐる事有、醫士の差圖に依るべし、其外、汚物附きて除き難き時は、粗製の鹽酸水少許を灑ぐ時は、淸淨と爲る、

(十八)病者上圖

一健康の大人にありては、大抵一晝夜間に、一回乃至二回の便通あるを常態とす、小兒は通常三四回、多きは五六回に及ぶもの少からず、若便秘する時は、健者に在

ては、病を誘起し、病者に在ては、憎惡せしむ、下痢は、便秘と同じからざれ共、概ね亦病を増惡せしむ、但、秘便又は病の場合に於ては、特更に下劑を用ゐて、下痢を促す事多し、此時は、速に病を治する助けと爲るなり、

二 看護者は、常に一晝夜間の、病者便通の度數、分量、便色、硬軟、臭氣、幷よ異物(例之バ、血液、膿汁、蛔虫等)の存否、等を記し置きて、一々醫士來診の節報告すべし、尤、甚しく下痢するか、又多くの血液を混ずるか、猶其他にも便通に異常あらば、來診の時を不待して、報告すべし、

三 重病者上圊する時は、徐かに被衾を除き去り、襪を穿かしめ、充分に衣服を着けしめて、感冒を防ぎ、看護者は病者の背後より、其身を支持すべし、
臥床を離れ得ざる病者にありては、清潔なる便器に、少許の温湯、若くは少し温めたる消毒藥を灑ぎて、衾中に送り入れ、背後より病者を抱き起して、半臥の位置に支持して、徐に便通せしむべし、

四 大便失禁するものは、臥蓐の上に油紙を敷き、胯間に多量の消毒綿を當置き、屢交換して、其都度皮膚を清拭すべし、

五便中異物ある等の時は、貯へ置て、醫士の撿査に供すべし、此時は、嚴重に密閉して、厠の側の寒冷なる場所に、貯へ置くべし、

六便器は、使用したる後は、直ちに室外に持去り、清水、曹達水、若くは灰汁、等にて十分に洗ひて後、日に乾すべし、砂を用ゐて摩るべからず、其他傳染病者に用ゐし便器は、醫士の命に依りて、嚴重の消毒法を行ふを要す、

七便器は數人の病者に流用すべからず、若し已むを得ずして通用する時は、醫士の差圖を受け、十分に便器を消毒したる後に非ざれば、他の病者に用ゐるべからず、

(附言) 金玉の紙上、汚穢の文字を列ぬ、看者の特に鼻を掩ひ給はんを恐る、されど共、糞の甜苦を嘗めて、慈父の病癒を、北辰に祈りし孝子あり、溺の辛甘を試みて、纖身所天に代らん事を、祖神に乞ひし節婦あり、聖賢の人、錄して万世の龜鑑と爲す、看者、冀くは、文字の汚穢を容捨して、事實を採りて、孝子、貞婦、若くは慈母、姊妹の、家居の職務の一端となる事を思し給はゞ、其益無きに非ずと云爾、

又云、本篇第三回以下本回に至るまで、「標題の次に第一篇一般看護の方法(つ

づき「し」と記入すべきを、落しぬ、次回よりは第二篇と知り給ふべし、

料理法增補序

待月葊

太古膳夫の職業は、磐鹿六獵命におこり、山蔭中納言政朝卿、中興の祖となりて法をたてられしより、世々に傳來して四條流といふ、前號まで載出したるは、其分派生間流の秘傳を公にものせるなり、食衣宅の三欲は、既往今來人情一致のものなるが、千利休茶事の風雅を中興してより、料理法また一派世に別立せり、庖丁の手際をあらそふ書院向の割烹に反して、庖刀の切れあぢをいはず、細工ものをなさず、柔らかに能煮、よく燒て、鹽梅加減よきところを客にはやく出し、くひあぢのよきを饗應の主とするなり、料理物も春夏秋冬、その時々の野菜魚鳥に、珍物を取合せ、また諸國の名產など到來せれど、これを出し、ありふれたる麁菜も、爲方よけれどおもしろく、賞味せらるゝものなり、されど取合せのはたらきに注意して、おなじ品をふたいろにつかはず、差閊なきやうにすべし、懷石は書院向二の膳つきの爲方とちがひ、膳部に限りありて、おほくも出さぬ定なれど、こゝろをこめて麁漏なく、ね

もごろに調理したると、清潔なるとを本意とすべし、他より庖丁をも雇ひ入れず、家内うち寄、妻君手づからきりきざみして、とゝのへ、亭主みづから持運で給仕するもてなしは、茶事の外にはあらず、またなき馳走といふべけれ、客も随意に飲食して、こゝろよくおもふものなり、狹き數寄屋のうちに、貴賤を隔てず入りまじり、和して語りあふ中にも、禮あれど膝をも崩さず、賓主信義を竭す交誼の親睦は、此清會にしく席あらざるべし、然れ共はた此道も、世につれ奢侈にながれて、とかくに、はしりの魚菜、珍らしきものを、あながちにもとめつかふを旨としたるは、凝たる人の癖弊といふべし、寂と侘との風雅をうしなひ、おごりとなりては過たる爲方にておもしろからず、譬へば秋季九月壺の名殘を催す。茶事に、初冬十月の口切に用うべきものを遣ひ、年始初釜に出すべきを、歳末忘年會などにつかひては、其時いたりて出すに珍らしみなく、前後ともによからず、季節いたりて出たる走りものは、つかひておもしろし、嘉肴も時ありて海老雜魚鯛鯉にまさりて味よきことあり、また東國にあるもの西國になく、西國におほきもの東國になく、國々所々にて、魚類野菜も一樣ならず、京坂には鱧おほくありて賞味すれども、東には稀なり、されど

懐石料理も、一むきには定めていひがたけれども、おもひ出るまゝに書しるし出しなむ、これを種として其國所々の賞翫をとり合せ賜はゞ、千變万化よきはたらきの趣向も出て、おもしろき爲方もできぬべし、つぎ〳〵にしるし出さなん、

家政雑事（一）

たまご、卵の性を撰り分くるに、常には日にすかして見ることながら、又一種のよきしかたあり、卵のほそめなる方冷かにて、丸き方暖かなるは性よきなり、両方共同じつめたさなるは、性わるく必ず腐りたるものなり、是を知るには、我が頬のあたりに當てゝ試みるべし、舌の先ならぞ、なほよく知らるなり、

暖　冷

卵を貯へおくに、其冷かなる方を下にして、塩か砂かの中に立ておけど、久しく保つべし、多くあるときは、下に一重並ならべたる上に、又砂か塩かを敷きて、卵をならべてよし、幾重にてもかやうにするなり、

切れにつきたる血、裁縫などの節、誤ちて手など刺し、切れに血の付かせしときは、生姜をおろして、其汁にて洗へばおちるなり、くゝみ水にすれどなほよし、

油のぬき方、襟、たけながなどに、油のしみた

るを落すには、揮發油をぬりて日に乾かせば、直にぬけるなり、一度にてぬけずバ、二度三度すべし、色合も、地合も損ずることなし、揮發油は尋常の油屋にあり、火のつきやすきもの故、よく／＼氣をつけて用ゐるべし、

炭、炭ことにきりずみは、一度水をよくかけて、かわかしたるがよし、俵のまゝそゝぎかけ、又は雨垂れおちにおきてもよし、火にして保つとも久しく、且手にてもちてもよごれず、塵もたたずしてよし、

疊に墨などこぼしたるとき、水を多くそゝぎかけてふきとれば、あとのつくことなし、

灰をこぼしたるときは、一通りはきとりて、其上、鹽を少々ふりまきおき、さて疊を叩けば、疊の目に入りしものも、きれいに其鹽につきてとれるなり、其あと雜巾よく／＼しぼりてぬぐふべし、

白き切れに墨の染みたる、白き浴衣などに墨の染みたるには、直に飯粒を糊のやうにねり、夫を墨の染みたる所に澤山な程につけ、さてよくよくもみ、飯粒の糊に墨のうつりて黑くなりたるとき、水に入れて洗へば、跡無く落ちるなり、程經たるにてもよし、

むしよけ菊、とて獨乙より渡りたる一種の菊あり、其花をかげぼしにし、細末にしてまけば、のみ、しらみ、其他の蟲をころし、又火にたけば、蚊其他のものを殺す、人には毒にならず、其種子は大學の植物園にあり、市中の種物屋に

もあるべし、近年薬屋にて、のみよけ粉などいひて賣るもの、皆是をもとゝす、但し蚤を養ふ地方にては、殆ど用ゐ難きものなり、注意すべし、

學園

本邦女子文學畧傳（第一）

目黒和三郎

緒言

女子の手藝が、男子と全く相わかれたるが如く、本邦の文學が、女子と男子と、全くわかれたるやといはゞ、その區畫境域とてはあらざるなり、彼の男文字、女文字とて、名稱は存すれども、男文字は、男子の專有物にて、女子は之れに與からず、女文字は、女子の專有物にて、男子は之れに與からずといふ事もなきなり、されば、ことに本邦女子文學と、標題こそ掲げたれ、女子の文學とて、一科のものあるにあらざることを、豫め心得てよ、即ちこの標題の意は、わが邦の女子中、文學の志向に富みて、韻文に散文に、今に傳へて、摸範となるべきものを作出著述せし、女流につき

て、その略傳をものせんとするにあるなり、女子文學家略傳となせど、こともなきを、さてはあまり事々しう、又さるまでの者ならぬをも揭げんとする心構もあれど、おぼろけなるを知りて、しひてもかくは名附けつるなり、
近きころより、文學史といへる著書くさ〴〵いで來て、女流の文學者につきて、彼是傳記めくやうのものも見ゆれど、殊更にこゝにいはんは、事しげきに似たれど、彼の何くれの文學史は、総体の權衡を保てるものの故、最も有名なる女流を記するに留まれり、故にこゝには、有名なる者は省くことあらんも、さ程有名ならざるも、その價をもてらん者は、大方拾蒐せん心構なり、
こゝに一ッあらかじめ言ひおくべき事あり、文學といふ上よりいふ時は、その女流の德性品行などには拘らぬ事なれども、今こゝには、その德性品行に、殊に注意して、批點することあるべし、そは女鑑の主意として、文學は德性品行の第二におけるなり、故にその文學の方にては、後の世にまで嘖々たる者なりとも、不德醜行などありし者は、附言を添へて、筆者の意見を述ぶる事あるべし、
吾が邦文學の一部たる和歌の道は、遠く紀元以前にありて、既に發達したるもの也、

古今集序に、久方の天にしては、下照姫にはじまりと書し、古事記などには、その以前沼河姫の長歌を載せたり、大國主大神の嫡后須勢理姫命は、八千矛の神の命の詠に、婦人の貞操を示し給ひ、豐玉姫の命は、阿加陀麻の詠に、愛慕の情を述べ給へり、是皆紀元前この道の發達せりし證なり、下りて、人皇に至りても、世々の皇后妃嬪の、よみ給へる玉什等、悉くのせて歴史に見ゆ、漢籍渡來後に至りても、この道はます〱隆盛に赴きぬ、即その尤なるものを擧ぐれば、黒媛、八田若郎女、女鳥王、衣通姫、輕大娘皇女、袁杼姫等の詠歌、實に誦すべきもの多きなり、次で萬葉集所載のもの丶如きは、百世の模範たるを失はず、間人皇女、額田女王、大伴坂上郎女の如き、長短のいづれを問はず、この道には秀手にして、又この道の蘊を發揮したる者なり、その他には彼の難波津の詠と共に、手習ふ者の口に上れる、采女の淺香山の詠の如きは、啻に文學上その趣味を稱すべきのみならず、この道隆盛の傳播力に、大に關するもの也、されど、以上の諸人につきて、悉くその畧傳をものせんも、さる事にてはあれど、こゝに一の難事あり、そは我が邦奈良朝以前は、言詞志向繁雜ならずして、自優雅自然の域にありたるを以て、誰人と雖も、思內にあ

れど、これを外に發して、直に歌謠すべき和歌とはなれりし也、實に當時は、防人の妻女といへども、吟詠感人の詠をなせしなり、再言すれど、文學者の區域は、上中下におしわたりて、際涯なく、その內一二の秀をとりて、他を殘さんことと至りて難く、加ふるに、文學とはいへ、以上にいへるが如く、唯その一部に止まれる事故、この標題の下に、悉く集むること能はざることと是なり、然るを桓武天皇平安遷都以後、延喜、天曆、寛和以後等に至りては、學問の道も漸く廣く、人々の志向もやゝ複雜に、女子の文學、復ひとり奈良朝以前の如く、一部に止まらずなり來にたり、是に於いてか始めて學者の中につきて、秀をぬき、傳を立つる效も見ゆる也、故にこの本邦女子文學畧傳の內に入るべきものは、奈良朝以前にあらずして、平安朝以後のものなること、是あらかじめ讀者にことわりおかざるべからざる事なり、

日本文典

杉谷正隆

おのれ前に、和歌のしるべをものしたりし時、終りに臨みて、再期を待ちて文典を說かんことを約せり。今は本誌も初刊の日より、殆三年の日日を重ね、三十七號を

發するに至れり。其の間女子に必要なることは、諄々として説き、懇々として述べ、殆ど餘す所なし。定めて讀者は、居ながらにして、萬般の智識を備へられたるならむ。敎の庭に咲き匂へる言葉の花を見ても、其の全豹はおしはからるゝなり。故に、おのれは次號より號をおひて、詳に我が國の文の典を説き明かさんとす。文典は、少しく高尚にわたりて、初學の人々の耳には、容易に入り難きものなれど、今まで掲載も見合せたりき。これ窃に時期の至らんを待ちしのみ。何となれど、讀まむ人の耳に入り難きものを、腦を苦しめ骨を碎きて、書きつゞけたらむとも、徒に勞して効なきのみなれどなり。然るに月を重ね日を積みて、今は其の時期の至れり。豈猶豫して讀者の希望を空しくし、約束に違ふべけむや。

凡、文典てふものは、世にありとあらゆる人の知らであるべきにあらず。一文字をだに知らぬ者ならんには、いざ知らず。苟も文字によりて、其の用を便せんと欲するものは、必學びおかざるべからざるものなり。其の故は、假字の使ひ方、言語の用ゐかた、助辭のとゝのへかた等を知らざれば、文字を並べて文章をつゞること能はざれどなり。かく云はゞ、或は、我は文典を知らざれども用を便ずるにまどし

からずと云ふ人もやわらむ。其は暴論なり。盲目蛇におぢざる言葉なり。云ふに足らず。論ずるに足らず。

繪をかくに、草木山河石水などの形のみ出來たりとも、風韻雅致備はらざれど、未眞の繪とは云ふべからず。書をかくにも、其の字の形のみ成れりとも、點畫の筆法嚴然として備はり、婉麗優美高雅なる處なければ、未以て眞の書とは云ふべからず。文章も亦然り。文の法則秩然として備はらざれど、眞の文章とは云ふべからざるなり。文章に似たる者をかきて以て、眞の文章と思ひ誤れるは愚の至りなり。故に朝に書面を認め、夕に日記を書くことより、遠きに送り後世に遺す文章の如きに至るまで、必要なるものは文典なり。此の文典を知らずして、文を書かんは、猶擢なくして舟をやり、鑣なくして馬に乘らんが如し。豈其の正鵠に至ることを得んや。されど苟も文字を使用して、己の意思を現はさんと欲するものは、務めて文典を學びおかざるべからざるなり。是おのれが本誌に於いて、說かんと欲する所以なり。然れども識淺く筆短し。讀者の心を滿たすこと能はざらむも知るべからず。其はゆるし給ひねかし。

女服考（第十五稿）

有住齋

夏のはじめの衣いろ／＼、

○藤がさね、白きすゞしのひとへ、松がさねのうはぎ、紅の小うちき、

○卯のはな、おもてしろく、うらあをし、白きすゞしの單、くれなゐの表着、ゑびそめの小袿

此外の色々、先にしるすにおなじ、四月中はあはせのきぬにて候、單は衣更のひとへとて精好のすゞし、いづれにもかさねられ候、又賀茂祭の日は、すゞしの五つ衣をもちひる事も候、

五月五日より、秋までのきぬのいろ／＼、

○あやめのひとへがさね、表青し裏紅梅すはうのうはぎ、二あゐの小うちき、

○花橘のひとへがさね、表くちは、裏青し、しろきうはぎ、すはうのこうちき、

○なでしこのひとへがさね、表こうばい、裏青し、すはうの表着、紅のこうちき、

○蘇芳のひとへがさね、をみなへしのうはぎ、二あゐの小袿、

○萩のたて青のひとへがさね、ぬきすはう、たて青、裏もあをし、すはうのうはぎ、女郎花の小袿、

○萩のひとへがさね、おもてすはう、うら青し、をみなへしのうはぎ、くれなゐの小うちき、
○女郎花のひとへがさね、表たて青、ぬき黄、うらあをし、紅のうはぎ、わかいろのこうちき、
○うすすはうのひとへがさね、濃すはうの表着、松がさねの小袿、
○紅のひとへがさね、二あゐの表着、くち葉の小うちき、
○二藍のひとへがさね、女郎花のうはぎ、すはうのこうちき、
○ねび染のひとへがさね、しろき表着、くれなゐの小袿、
○しろきひとへがさね、紅のうはぎ、ふたあゐの小うちき、
ひとへがさねは、うへはすゞしの織物、或はうすものゝ綾、下はあやのひとへを、ひねりかさねられ候、下さまは平絹のうす物などをもちふ、又綾を何色にも染、はりてもちふるなり、あやめ、たち花は、五月中、なでしこは、六月まで、女郎花萩は祇園の會より、秋のうち、めさるべく候、表着小うちきは、皆すゞしの織物、或は二重織物をも上さまは用ひ給ふなり、
九月九日よりのきぬ、いろ〳〵、
○菊もみぢ、又何色にても、五衣、すゞしにうすき綿入て用ひ候に、近比は如何候哉

らん、
十月より、五節までのきぬ、いろ〳〵、
○菊の御衣、うへ五すはう匂、ひ下三ゑろし、わをきひとへ、黄青裏のうはぎ、表黄裏青龍膽の小袿表すはううら青
○紅葉重八、黄色三、山吹のこき、うすき、一かされ、紅のこき、うすき、一かされ、すはう一ツ、合八ツかさぬるなり、くれなゐのひとへ、菊のうはぎ、黄ぎくの小うちき、
○白菊おもてしろ、うらすはう、紅のひとへ、黄きくのうはぎ、すはうのこうちき、
○黄菊おもて黄、うら青し、くれなゐのひとへ、ゑろきうはぎ、ゐび染の小うちき、
○うつろひきく、おもて中紫、うらあをし、紅のひとへ、松重のうはぎ、あをき小袿、
○黄もみぢ、おもて黄いろ、うらすはう、くれなゐのひとへ、すはうのうはぎ、青きこうちき、
○はじ紅葉、表すはう、うら黄、くれなゐの單、えびぞめの表着、すはうの小うちき、
○かへで紅葉、表うす青、うら黄、蘇芳のひとへ、紅のうはぎ、ゐびぞめのこうちき、
此外のいろ〳〵は、さきに春冬の色の所に志るしをはりぬ、以上後成恩寺殿下の御抄のうちより志るしぬ、今按から衣きる時は、小うちきはもちひられず、
女官飾抄及曇花院装束抄にもみえたれど、同じ如きによりてくた〳〵しければもらしつ、

武家女中常服

正月、上着地黑、地赤、地白、綸子、摸樣定りなし、松、竹、梅、椿、鶴、龜など、目出度もやう、心にまかすべし、何もかのこを染入る也、殊なる貴人は、素縫を用ひ玉ふ事あり、間着紅とす、されども、平人は縫あるべからず、地赤を着る時は、もゝ色うこんなど着べし、紅重は着べからず、下着白むく、二ッ着べし、はだ着白羽二重、若き人は白ねり、紅梅等を着べし、たとへど、元日は地黑、二日地赤、三日地白と、次第取て着べし、

二月、正月におなじ、白むく一ッきる也、式〳〵には、正月も一ッきるべきとぞ、肌はいつも有べし、

三月、上着地黑、地赤、前のごとし、間着白綸子、ぬひの事、前におなじ、是を間白と云、間白とは、紅糸をいれず、裏紅也、朔日二日は、二月に同じ、三日より間白を着する事、家格によるべし、上巳には、かならず、紅か、もゝ色の綸子を着す、もやうは、桃の立木などあるべし、白むく一ッ也、

四月、地黑、地赤、地白の袷を着すべし、次第前に同じ、下着白袷をかさね、着す

べし、降帶、こし卷也、近來多、袷には地白を用ふる也、むかし牡丹の袷と云もの、則地白なるべし、縫なきを素ばたんと云、

五月、四日迄、四月に同じ、五日より單物を用、地色等は袷に同ト、下着白ひとへをかさね着るべし、帶腰卷、四月に同じ、家により、端午には、紺地白のかたびらとて、さらしを、花田に、もやうを白く染ぬき、縫入たるを着し、六日より、ひとへものを用とも云、家風によるべし、

六月、地黑、地赤、地白の帷子、下着白かたびらをかさぬべし、帶こし卷、前に同じ、近世地白のみ用、たま〳〵地黑も用、地赤はたえて用ひず、晴には必地黑用べし、

七月、六月に同じ、七夕には、白帷子、萩、すゝき、梶の葉等の箔もやうを着すべし、帶こし卷、同前、畧義には、七夕にも、地白かたびらを、用といふ、

八月、八朔、地白綸子、ひとへ、白かたびらを重、帶腰卷、同前、當月中、ひとへ物を式とす、色の次第、袷に同じ、八朔に七夕のごとく、箔もやうを用る事、家風によるべし、

九月朔日より、八日まで、四月に同じ、重陽より、二月に同じ、重陽には、花色りんずの、ぬひもやうを用る家もあるよしなり、
十月、二月に同じ、猪子には、紫りんずの、もやうを着すと云、家風によるべし、猪子まで、間白を着し、ゐのこより、間紅を着すとも云、家風によるべし、
十一月、正月におなじ、
十二月、正月におなじ、

漫録

七女七言

鳴立庵主人

泉式部曰はく、皆人の我に愛なる時は、その悪見ねず、我に疎ある時は、その善見ねず、獨悪のみます〱見ゆるものなり、愛すれども、その悪を知り、悪めども、その善を知るは人也、殊に女の身には、貴き賤しき心なくて、色を見て枝を折るの譬あり、常に直き心をもちて、貞心なるべきこそ、女の本意なるべけれ、
右大臣内麻呂の女貞子曰はく、男子ならぬ身のふ

るまひは、思千々にありとも、色外に出さぬを女とやいふべき、たゞに、口さかなく、心くねりて、清きをのこの心に見えんこそ、はづかしきはみなるべけれ、

二條院讃岐曰はく、今の世の人、自の生れ日をよろこび祝するは、大なるひが事なり、吾はこの日に涙を流し、母の千苦万苦を思ひて、食事をも忘れて、たゞ泣入るばかりなり、

小宰相局曰はく、かみつ方の、聖賢の道にうとく、世智にかしこきは、必下万民を苦しむる種なり、なみ〳〵の人の、萬にかしこくとも、みさをの不定なる人は、もちうるに益なし、女のよろづにかしこくて、吾が夫に疎きが如し、

大納言佐曰はく、女は貴きいやしき品、あまたありとも、一筋に心を専に守るを第一とす、たとへば、位貴き人の、よろづの道にかしこくとも、貞心専らならざれば、女とはいふべからざる如し、

敷政門院曰はく、貴きとなく、賤しきとなく、女の何事にも物にさしいらへして、心得たるさましたるは、必二心あるものなり、はづかしき事にこそ、なべて昔より、女ははかなきものにて、をとこの色々いひしらふには、百人は百人ながらも砕くる心いできて、長きうき名を流すものなり、此おもむきに、心を注けて、骨は粉にくだき、ししむらは泥にあるとも、名を思はん女は、道を守るべき事なり、人はわが好む方に、あやまりありと云事をしるべし、好まざる方には、あやまりはなきものなり、

維子曰はく、夫女は、かたちのよしあしを取らず、言葉すくなに、愛敬あるこそ、第一の女なれ、をのこはうちに、文字ありて、人の噂の善惡いはで、妄にいかりのなきを、第一のをのことはいふべきなり、

古今集傳授一班（つゞき）

森　馬太

細川玄旨法印は、中院通勝卿、三條實條公、烏丸光廣卿、三條實國卿なんどへも傳授ありしが、丹後國田邊に籠城の時、古今集証明の狀を、式部卿智仁親王に奉るとて、いにしへも今もかはらぬ世中に心のたねをのこす言の葉、の一首をそへられたり、その後、幾程もなくして、古學勃興の運に向ひしかど、堂上の古習として、尙その傳授を尊崇し、甲傳へ乙受け、更に絕ゆることなかりきと雖も、これを信ずることの厚き、また古の如くはあらざりしなり。この故に、今もまたこゝに筆を絕ち、傳授に關する雜談、及、傳授の條目を畧記して、これが局を結ばんとす。

二條爲世卿いはく、民部卿入道（爲家卿）に、古今の說をうけんとて參せし時、法師にて、聞書などはえなされたる程に、その爲に定爲を具して侍りしかど、今日はさしあふことあり、後日來るべき由仰せられて、內々、なにとて、人をつれたるぞと申されき。仍りて後日に、一人まゐりて說をうけ侍りきといへる、この一事、以て如何に傳授の價値あるかを知るに足らん。恐らくは、佛氏の

眞言秘密といふとも、これにはよも過ぎざるべく、越中富山反魂丹の家法も、これにはまさらざるべし。

武者小路實陰公、ある時、似雲法師を召していひけるは、この箱傳授は、本朝無双の秘事、唯受一人の大事なり、予が禁裏出勤のあと、いかやうの天災あらんもはかりがたし。土藏文箱かたしと雖も、盗火の難、心ぐるし。この故に、今これを汝にあづく。汝これを坐右におきて、厚く保護を加へよと、似雲これをうけて、守ること三年に及ぶ。たまく、近隣火を失ふことあり。法師つらくおもへらく、この箱、貴は即貴、重は即重なりと雖も、わが心、これによりて安からず。わが身、これがために縛せらる。これを返上して、以てわが好むところをなさん。と即病に託して武者小路家を辞し去りしといふ。嗚呼沙門にしてなほこの執着あり。況や、この他群小頑迷の徒をや。

阿佛尼が眞蹟として傳ふるところの秘傳書の中に、宇治山喜撰法師は作りものなり、これは清和天皇の御事なり。其故は、うぢ山とは、内裏をば大内山といへるあり。喜撰とは、清和天皇の十善萬乘の王位をすて、此世バかりの樂なりと思召、御法のみこころめでたきなれと思召とりて、三十の御年、御ぐしをおろして、都のたつみにあたれる、水尾の御寺に御籠居ありて、此歌をあそばしたりけるなり。たゞ清和の御一期には、佛法の事のみ執行いとなませたまひて、歌の道をばさしおきたまへりしかば、此歌たゞ一首よみたまへる故に、

喜撰とかきては、よき事をえらぶとよめど、佛法をえらび、佛法に歸したまへる時をいはんとてなり。など記せり。（つゞく）

女誡和觧（承前）

内藤燦聚

和叔妹第七のつゞき

夫れ叔妹は體敵しくして分尊し、恩疏にして義親し、若し淑媛謙順の人は、則ち能く義に依て以て好を篤くし、恩を崇て以て援を結び、徽美をして顯章にし、瑕過をして隱蔽せしむ、

夫れ叔妹は體敵しくして分尊しとは、叔妹と巳との位の體をいへど、同輩にして、さして尊卑の差別もなけれども、巳は嫂と稱し、彼は叔といひ、妹と呼ぶ、是れ巳が分彼よりは尊きなり、」恩疏にして義親しとは、叔妹と巳とは、もとより異姓にして他人なるが故、其の恩は疏なれども、叔妹は巳が夫と骨肉のものゆゑ、義理あひに於て、親みむつまじくすべきものなり、」若し淑媛謙順の人は、則ち能く義に依て以て好を篤くし、恩を崇て以て援を結ぶとは、淑はよきなり、媛はうつくしきなり、謙は人にへりくだり、順は人にしたがふなり、うつくしくよく人に順ひすなはなる婦人は、叔妹は夫の骨肉のものといふ義理によりて、其の睦しくすべきよしみをあつくし、其いつくしみ交るべき道をたつとび行ひて、巳が援となして、かたくこれをとりむすぶとなり、援を結ぶとは、平日叔

妹と親みむつましくするときは、もし過て舅姑の機嫌をとりそこなふことありとも、叔妹よく己をたすけ執成て、舅姑の怒を宥め得るなり、」徽美をして顯章にし、瑕過をして隱蔽せしむとは、徽美はうるはしくよきことなり、顯章はあらはしあきらかにするなり、瑕過はきずあやまち、隱蔽はかくれふさがるなり、このこゝろは、前にのぶる如く、叔妹と好を篤くし、援を結ぶ時は、巳がうるはしくよきことは、あきらかにあらはれきこえ、過きずあることは、かくれふさがりて、外へもれきこえぬなり、是れ叔妹の援とりなすによりてなり、」

舅姑矜善して、夫主嘉美す、聲譽邑鄰に曜き、休光父母に延く、若し夫れ惷愚の人は、叔に於ては即ち名に託して、以て自ら高ぶり、妹に於ては則ち寵に因て以て驕盈なり、驕盈既に施せむ、何の和かこれあらん、恩義既に乖けむ、何の譽かこれ臻らん、

舅姑矜善して、夫主嘉美すとは、矜善は、あはれみよみすなり、嘉美は、よみしほむるなり、上に述る如くなるときは、舅姑もあはれみよみし、夫にもよみし譽らるゝなり、」聲譽邑鄰に曜き、休光父母に延くとは、聲譽はよき名のほまれなり、邑はさと、鄰はとなりなり、曜は光の物に照わたるなり、其譽近くは鄰、遠くは一邑の中へ、きこえかゞやくなり、休光はよきひかりなり、父母は我が實の父母をいふ、巳が聲譽邑鄰にかゞやけむ、父母までに其光引及ひ

て、諸人その父母をもはめはやすなり、第一章の、名稱のきこえざる、黜辱の身にあると、いまだ是を見ず、といふに、考へ合せて見るべし、」若し夫れ惷愚の人は、叔に於ては則ち名に託して、以て自ら高ぶり、妹に於ては則ち寵に因てもつて驕盈なりとは、惷愚は、二字ともにおろかなる婦人をいふ、叔に於ては則ち名に託して自ら高ぶりはこるなり、妹に於ては則ち寵に因て以て驕盈なりとは、妹にむかひては巳が夫に寵愛を得るをたのみをごりて、ないがしろにするなり、驕盈はをごる心の、わくまでみつることなり、」驕盈すでに[illegible]せば、何の和か是あらん、恩義すでに乖けむ、何の譽か是れ臻らん とは、驕盈の心 叔妹に施し及ぶときは、叔妹とやはらぎ親しむといふことはなきなり、さすれむ恩しむべき義にも逆ひそむきて、はまれの巳が身にいたるとはなし、といふことなり、是れ第一章の、何ぞ名稱のきこゆべく、黜辱の遠ざかるべきとあらんや、といふにあはせ見るべし、」是を以て美隱れて過ち宣ぶ、姑忿りて夫慍り、毀譽中外に布き、恥辱厥身に集る、進では父母の羞を增し、退ては君子の累を益す、斯れ乃ち榮辱の本にして、顯否の基なり、愼まざるべけん哉、然るときは叔妹の心を求むるには、固に謙順より尚るはなし、謙は則ち德の柄なり、順は則ち婦の行なり、凡そ此の二つの者は以て和するに足れり詩に曰く、彼に在ても惡まるゝとなく、此に在ても射るゝとなしとは、それ斯の謂なり、

こゝを以てとは、前をうけていふなり、」美隠れて過ち宣ぶとは、たとへ巳がよきことありても、掩ひかくれ、またわづかの過あれど、宣あらはるゝなり」、姑忿りて夫慍り、毀訾中外に布き、恥辱身に集るとは、毀訾はそしりそしるなり、中外は、うちそとなり、恥辱は、はぢはづかしめなり、その身は巳をさす、集るは多くのことひとつにより集るなり、姑すでにいかりて、夫もいきどほり悪むときは、さま〴〵の中ごとなど起りて、其そしり中外にしきのべて、はづかしめ巳が身にあつまり来るとなり、」進では父母の羞を増し、退ては君子の累を益すとは、進退は文句の順辞にて、あるひは出るといひ、入るといひ、また内といひ、外といふ如く、句を

對にし、ならべいふ言葉なり、君子は夫をいふ、毀訾恥辱巳が身に集り来れバ、上は進で父母にまで其恥を増及ばし、下は退て夫にわづらひを益し施すなり、斯れ乃ち榮辱の本にして、顯否の基なりとは、榮はさかえ辱ははづかしめなり、上にいふ如く、徽美顯章瑕過隱塞すれど、榮となり、此にのぶる如く、美隠れて過宣れど、辱となるが故、榮辱の本といふ、顯否はあらはるゝとふさがるゝとなり、基は始なり、愼まざるべけんやとは、愼むべきとかへる言葉にて、深く誡むる意なり」、然るときは叔妹の心を求むるには、固に謙順より尚るはなしとは、叔妹のこころを求め得るには、よくへりくだりしたがひて、そのこゝろにさからはぬよりまさるとはな

しとなり、」謙は則ち德の柄なりとは、易經繫辭傳の文なり、德は我に得る所のよき行なり、柄はえにて、すべての器に柄なくては、ものゝ用をなさゞる如く、謙も德の柄にて、謙なくては德も行れずとなり、是れへりくだりしたがふとは、德行の第一とすべきをいふなり、順は則ち婦の行なりとは、婦人の行は、人に順てわが意をたてぬを、第一とすべきなり、」斯の二つのものは、以て和するに足れりとは、謙順の二つの道をよく行ひ得れば、舅姑及び叔妹の際を和らげむつまじくするに足れりとなり。足とは、不足なく全きをいふ、」詩にいはく、彼に在ても惡まるゝとなく、此に在ても射はるゝとなしとは、詩經周頌振鷺といふ篇の句なり、射は厭と同じく、いとふなり、この心は、謙順の人は、かしこにありても、こゝにありても、いとひにくまるるとなしとなり」、其れ斯の謂なりとは、詩經にかく述る所も、則ちこゝに敎へさとすのいはれなりと、詩をひきて、七章の終をむすぶなり、」

豐前守紀正毅和解並書（花押）

（未完）

縣居遺文（承前）

楢の舍校註

歳暮

いたづらに早くもこゆる年なみを

などしがらみにせきとめん哉

などしがらみにせきとめんかな、引直し、などせ

きとめんゑがらみのなき。など丶いふ、うたがひとがめたる詞ありては、かあとはおきがたく、ととのひ侍らず。たゞ、ゑがらみのなき、とゞめ給ふよろしく候。よて引直し侍り。

戌申いふ。などといふ詞には、かならず、などか、とかもじそふ意なり。されど、ぞのやかの、かのか丶りになるなり。すべて、詞にか丶り結のてにをはあり。はものか丶りをぞ、く、す、ず、じ、つ、畢ぬ、ふ、む、ん、ゆ、る、り、過き、現し、まし、らし、かな、つ丶と結ぶなり。ぞのやかのかかりをぞ、不ぬ、ふ、む、ん、る、る丶、現き、現しき、過し、まし、らしと結ぶあり。こそのか丶りをぞ、け、せ、て、ね、へ、め、れ、現き、過し、過しか、らし、ましかと結ぶなり。是らの事、本居先生の詞の玉の緒、てにをは紐鏡、さては戌申が語學新書、ことぞかゞみにくはし。楢の舍いふ、こ丶に註せる現過は、現在と過去との畧語なり。

元日

天の戸のあけそむるより春がすみ
　たなびきけりなむかふ山のは

此御歌、たけ高く、詞もよろしくと丶のひて承る。この御歌と、前の歳暮の歌を、御懷紙にて、たまはり候はん。たゞし、元日を先に、歳暮を次に書きて出す事に候。さて、はし書は、元日をぞ、としたつあした、歳暮をぞ、年の暮に、如此か丶せ給ひてよく候。

楢の舍いふ、縣居先生の人を敎ふる、つとめたりといふべし。但、この元日の歌、むかふやま

のは、ととめたるは、くだけてきこゆ。

賭弓

もゝしきやつらなる庭のあづさ弓
雲井はるけくとものひゞきて

引直し、けふ春のゆみのみゆきのなりぬらん雲井はるかにとものねぞする。ゆみ殿にみゆきありて、弓ははじむるなり。なりぬらんとは、行幸の儀式、御着座の式などの、終りての心なり。弓場殿とも、又、弓庭殿ともかくなり。

戊申いふ、賭弓は、正月十八日なり、みゆきなきぬ、と源氏にみゆ。

みとせのおもひのうた

ゆめとのみ三年をすぎてけふ更に
かへるうつゝのなほぞ悲しき

三首ともに、御なげきの程深く承る。されど、三首ともに、同じおもむきに候はんも、いかゞに侍れバ、時の物をそへてまゐらすめり。かゝる事にも、其折からのものを、何れにてもとりわけて、それに付て、ふかき御心ざしをものへ給ふぞ、あはれもまさるわざに候なる。

いとせめてけふの手向の一ことも
かへらむつてむ山ほとゝぎす

さみだれは晴行くほどの日數へて
けふまたそふる袖のなみだか

終のかは、かなの意なり。古今集にも例あり。かやうの時の御歌かゝせたまふには、うすゞみ色の紙か、又、あゐなる紙をも用ひ候。喪服の色にて候なり。右、同じいろの紙を、かさねて書きたま

ふことなり。うつくしき色なるをも、用ひたまはぬことにて候。歌書き候にも、墨くろに玄かと書き候は、かやうの時はあしく候。うすゞみなどにて、字もほそく打ちらさで、つくろはぬやうに書くことに候。賀の歌は、墨など少しこきがよく候。

戊申いふ、かなは、そのやかのか、感動言のなをそへたる詞ゆゑ、疑問感動のふたつにわたるなり。

こぞの秋うせたまふ云々

なきてこし夕のかりのたよりにも
　かへらぬ人のおとづれぞなき
おもほえずけふの手向にをる菊の
　わらぬたもとの露やおくらん

紙は、懐紙に用ひたまふ、鳥の子の染紙の中に、うす墨色さまなる、あるはまにあひの紙、うすやう紙など、それを二枚重にてよく候はん。又、うれへの時は、青き紙にも書き候ものにて候、かの紙の中に、あゐ色なるを、同じ色二枚がさねにて、くるしからず候。うすゞみも、喪のきぬの色なれど、かゝる時、又は、死のとぶらひなどに書き候。此度は、藍鼠色、猶よく候べし。源氏物語の葵の、思ひにこもりたまひし時、六條の御休所よりのふみゑも、空色の紙と候ひしは、あゐ色のうすきなり、右の紙に、懐紙のさまに、竪にかきたまひて、同じ色のかみを、ほそくたちたるを、はゞ二分ばかりにたゝみ、ちよと中を結びて、おもてにて、かたわなにゆふなり、其上を、又同じ色の

紙二枚重ねてつゝみて、上を、たてぶみの上のはしを折りたる如く折りてよし。包の紙は、横にして包み候へど、上を折るほどあまり候なり。歌は、二行づゝに書きたまふがよし。次の歌の句の終、二三字下にて、左へよせてかきたまふがよし。あまり打ちらして、風流めきたる樣には、うれへの時はかき候はず。白菊の枝の長さにつけて、おくりたまふがよろしく候べし、付樣は、枝のよきほどの所に、つけ候なり。かやうの時は、紙よりにてつけ候ことなり。紙より三つ一つ計の所へゆひつけて、片がたは、長きをうたわなに、ひき折に結ぶなり。さて、枝につくるも、同じ長さの紙よりを、右の包みたるこよりへ通し、枝につくるも、右の結めの如し。又云、其紙よりなるは、枝につくると云、此結たるは、枝にさすといふ。諸抄にもみゆ。

楢の舍いふ、歌の書きざまにつきては、必、ふるきによれとしも、いふべきにあらねど、今の世は、その式いたくみだれて、時と處とにかまはず、すら〳〵とはしりがきするを、こよなきことゝ思へるは、いみじきひがことなり。天地の循環、四季の變遷、みな各そのことわりありて然るなり。夏の日に雪ふり、晦日に夕づく夜出では、その順にたがへりと知るべし。

村田春海　歌がたり（承前）

松野操雄

或人の曰く、うたは、世々のすがたあるものあれ

ど、その世にては、その世のすがたに、したがふべきものなり。末の世にありて、いにしへのすがたを、まなばむとするは、まことならぬわざなりといへり。こは、おのづからなる、ことわりのやうなれど、ものゝよしあしを、わきまへぬわざになむ。すべての事、すゑとなりては、かならず、ひがみもてゆきて、わろかめるあらはしも、出でくる物なれど、よく、そのまことの、たゞしきすぢをもとめて、いにしへに、立ちかへらでやはあらむ。なにわざも、みな、しうるならひぞかし。さて、いにしへをまなぶを、まことならずとおもふは、ものならふすぢに、くらきわざなり。いにしへをまなび、古をうつさむとするが、おのづからならで、まことならぬやうにみゆるは、その

まだしく、とゝのふらぬはじめのほどこそあれ、これを、わがくちになれ、こゝろに、ふかく得たらむときは、我と古のひとゝ、なにか、ことなるけぢめあらむ。さてしも、ゆくりなく、口すさみ出づるも、みな、古ならぬはあらずかし。手かくわざを見よ。そのはじめの程は、かの筆、此あとをまなぶめりなど、人めにも、わかちぬべけれど、そのまなびえたらむ後は、おのづから、わがものとなりて、いにしへのひとによらで、われとわがなし出でたるやうにぞみゆる。この歌も、また、かくのごとくにあむ有りける。もし、あるひとのいへるを、ことわりよしとせど、人のこゝろのおきても、いにしへの、かしこきひとをどまなはで、わろかりとも、その世の人のこゝろざまに、ならへ

といひて、ことわりかなふべしや。もの丶こ丶ろをもたざらで、か丶るひがごとなすこそ、わろけれ。」長歌は、たゞ、萬葉にのみ、すぐれたるがおほし。そは、藤原、奈良のころしも、みさかりにて、よろづ、たらひと丶のひ、今の都となりては、はや、此體は、すたれにたれぞなり。古事記、日本紀などに、長歌おほくみゆれど、そは、あまりに、ふるきさまにて、すなほに、とりつくろはぬところは、おのづからにて、めでたけれど、猶わかぬ處おほし、とやいはむ。藤原、奈良のころのひとのよめるは、事をひろくのべ、いきほひ有りて、こまやかに、詞をかざりたること、これより前にも、たぐひなく、また、是より後にも、なぞへなし。古今集より、こなたのは、いたく、つたなき物なり。そは、世にすたりにたるま丶にて、こ丶に、ちからを、もちひける人、なかりし故なり。いま、ながうたよまむには、かならず、萬葉を、よく、學ぶべし。長歌は、萬葉の歌をおきて、べちに、ならぶべきすがたはあらず。さて、長歌は、句のいきほひ、と丶のへがたきものなり。萬葉の詞をのみ、とりならべて、まねび出でたりとも、萬葉のうたの、いきほひを、うつさゞれば、ゑらべくだけて、むげにつたなかるべし。此いきほひだに、よく、心えたらむには、後のことどもを、まじへもちふとも、猶、いにしへの、長歌のさまをぞ、うしなはざるべし。縣居の翁が長歌に、ことども、後の世のことどもにて、いにしへのさまを、うつしたるがおほし。こは、この翁より始まれる、ひと

つのすがたなれど、今の世にて、長歌よむには、此體にならはでは、かなひがたし。長うた、おほく、よみ心みたらむ人は、このあぢはひを、しるべきなり。

（つゞく）

花のなごり

方丈庵主

みやま木のその梢ともみえざりし櫻ははなにあらはれにけり」馬に鞍おきて、見に行きし人もありつらんよ。櫻ばなさかりになれば ふる里の葎のかどもさゝれざりけり」葎の門のみか。たましひも、あこがれ出でぬるものを。花ざかり四方のやま邊にあくがれて春は心の身にそはぬかな」猫も杓子も、戯蝶をまねばざらんやは。吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねん」花をあはれみし心の深さは、その人がらさへ面影にたつよ。又や見んかたのゝみのゝ櫻がり花のゆきちる春のあけぼの」如何ばかりおもしろかりけん。清少納言が草子のはしがきは、たゞに雲のけしきとのみ限られざりけらし。今日くれぬあすも來てみん櫻ばな心して吹け春の山かぜ」心をのこしての還り路は、足の乘物いかに重かりけん。さなり。今日くれぬは、額の上のこぶなるべし。これなくば、顏ばせ一ときはまさるべきに。もゝしきの大宮人はいとまあれや花をかざしてけふも暮しつ」ゆかしの世のさまや。上野わたり、隅田のほとり、俗麗天をおほひ、臭氣はなをうがつ。うつればかはるならひとはいへ、赤人ぬしよ見せまつらまほ

し。うらやまし春の宮人うちむれておのがものとや花を見るらん」佛の人を敎へしは、物につけて執着なかれとなり。さても良暹法師は、なほ思ひすてがたくやありけん。能因も、世中をおもひすてゝし身なれども心よわしと花に見ゐぬる」さもありなん〳〵。七情物によりて動くは、この世に生れたる者の、免るゝこと能はざるところ。おまへ百までと契りし、九十九髪の人も、花にうかれて忍むずや、忍が岡に杖を曳きしも、ろのことわりあれむなるべし。ちりかゝるけしきは雪のこゝちして花には袖のぬれぬなりけり」目ざましく散る花のもとには、おのれも半日むかり、たゝずみぬるは、いもやすくねられざりけり春の夜ははなのちるのみ夢に見ゐつゝ」をしむにとまるものならなくに。身にかへてをしむにとまるものならむ今日やわが世のかぎりならまし」花何を以てその志にむくいんとする。己愛のために容づくるは、まさにこの時にあるべし。庭のはなもとの梢にふきかへせ散らすのみやは心なるべき」甲斐なき恨をのぶるも、落花のためには二なき追善供養なるべし。久しかれあだにちるなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり」何所もおなし春の夕ぐれ。青葉にろよぐ風の景色よ。

安政八年板 婦女髪様（承前）

井上頼文寄贈



山かたくりびん　に　そぎつと
むすび立ひやうで



中なでびん　に
かもめつと　かたわげ



古人の歌　あゝま

芋を洗ふを見てたはぶれによめる

橘守部

山畑にうちてし芋を　土ながら根引にひきて
處女らが籠にとりいれ　川の邊に洗ふを見れば
より集ふ芋の子どもは　そひきつる親をも放れ
馴來つるうからも離り　根ざしより悪く生しも
ともずれに磨成されて　よき芋と皆なりにけり
こを見れば人の子共も　生立ちてやゝ頃たゝむ
生してし父が手はなれ　育みし母が手さかり
世の中の人にまじりて　もまれては其身を磨き
すられては其身を磨き　共ずれにすれて後こそ
よきひとゝなれ

よの中の人の子ども、芋の子の
ともずれにして身を磨かなん

こぼれ梅

渡部乙羽

其一

元祿の名殘未だ失せやらで、人は蝶花のうつらくと、華美のみを衒ふ寶曆の頃は、一𧘔𧘕の鯨自然と挫けて、骨の無き武士の多かる中に、これはまた女性の身として、一段に勇しき二人の尼あり。

さりながら其名も伏屋の裏に、埋木の花咲く折もなく、世の秋を觀じてにや、時雨の落葉に身を任して、老いて俤の移れども、色も香も無けれど、墨染の腰衣に娑婆を包んで、門外不出、他人に見らるゝを好まねど、盆に栽ゑし吉野櫻も年々に憔悴して、可惜盛りを垣間見られずして凋む憾みあるを、況てや女子に百年の春あるものにあらず、一朝粉臙の粧ひ褪めては、花の木蔭に駒繫ぐ人さへあるべからず。この二人の尼の昔時の俤慕はしきは、今も眉目の間に殘る愛嬌なり。何日の頃より

頭剃りこぼちて、斯かる土地に住み詫ぶるにや、訝かしき限りなりと、村内の不思議の一つに算へられけり。

名にしおふ隅田川白髭の社より、やゝ東の方に踏ん込みて、秋ならぬ白晝も虫の音を聞くべき閑靜なる處に、よしありげなる庵あり。小柴垣を結ひめぐらし、門の栞戸半ば開きたり。一方は竹叢に隱れて自然の城廓をなし、一方は田の面を見渡して、清風絶ゆる間なく、垣の外には小川流れて、さや〳〵と水音の聞ゆるに、春は一枝の梅に知られて、南は早く笑ひ初め、麗らかなる日影は茅葺屋根の廂を辷りて、障子の骨四つ五つ目を照しぬ。只看れば容目うるはしげなる尼の、庭前の井戸端に出で、閼伽桶に水を汲み、早咲の梅花一枝手折りて、竹椽の下に立寄り。手向けの花を折りたれど、靈前に供へ給へと呼はれど、室内には念佛の聲頓に止みて。新らしき花を供じ給はんとな。命日の靈も嘸ぞ喜び給ふべし、いざ此方へ賜はれと云ひつゝ、障子開けて立出で、靈前に花を供ずるは、こもまた優しき尼なりけり。手にかけし念珠に稱名の數とりながら、椽の端に直と座して。おう何時の間にか、美事に梅が咲きましたあ。御身も妾も斯かる身になりてよりは、花も月も慕はしき事の





なく、たゞ〳〵一門の冥福を念ずるより外無けれど、春秋も知らぬ間に過ぎ、こゝに三昔しの今日は、大石殿始め各々が果て給ひし日なり、松風吹いて寒月泉岳寺の墓前に冴ゆれど、妙海殿は菩提所を守護し給ひて、念佛修行に退轉なく、妾等も此處に庵を結びて、御奉公申し居れど、今もなほ慕はしきは父上が御事なり、時も如月の半を過ぎなれど、俗にありし頃は、父上と共に野に清香を趁ひける折なるに、斯くなりては蝶よ心の移らふともなくて、徒らに餘年を貪ばることの氣樂さよ。御身は回向仕果て給ひしか、妾の勤めは濟みたれど、代りてなし給はぬかと睦ましげに辞を交ふれど、庭前にありし尼はうち頷きて。さらば妾代りて回向いたすべし、いざ見たまへ、出家には要無き色香あれど、梅花の咲き揃ひたる杯、なか〳〵に興ある眺めなり、庭前に下立ちたればや、履物を参らせんとて、室内に入れど、尼は云ふが儘に庭前に下りて、其處此處とそゞろ歩く時、物申の聲して、門より入り來る男あり。年は五十路の坂を越ゑつらんか、相好に憎氣なく、腰には大小を佩したりけり。

尼慌たゞしく出でゝ、何處よりと問へど、男は慇懃に會釋して。我はお目付役を勤

むる者なるが、弗と御門前を通りかゝりしに、折かけ垣の梅の花の、いとも美事に咲きゐたれど、數奇の心に立寄りたり、煙草の火を惠み給はれと云ふに、尼は機嫌克氣に微笑みて。おう〳〵、ようこそ入らせられし、こなたへ掛けさせ給へ、妾等斯く住み詫びては、訪ふ人も無き柴の戸、雨に曝されたる椽なれど、塵は能く拭ひ置きたれど、腰を下させ給へと、うち解けて物云ふ程に、茶を汲み來りて客にすゝめ。常に客人とて無ければ、茶臺樣の器もなし、ゆるし給はれとて、差出す茶碗を客は手に取りながら、只見れば尼の掌に刀瘢とおぼしき痕あり。訝かしと思ひながら、その顏ちらと打瞻れど二人ともに賤しき人とも見えず、今もなほ優しき顏に、凜としたるところありて、人品の氣高きこと高家の姫君とも見擬ふべし、兎も角も若き時のさま、思ひやらるゝまゝに、客は茶に咽喉をうるほして、尼御前には、何日の頃より此處に住み給ふぞ、若かりし時は、お宮仕へなどし給へりしや、花も羞らふ御俤にてありしならん、世の諺にも容目美きは身を滅ぼす斧とか申す、お小姓の誰やらと、左樣した譯の事ありて、浮世の中の儘ならぬより、斯かる姿になり給へるにはあらぬか、懺悔には百の罪も消ゆると聞く、語り聞かし給はんやと問ひ出づ

れど、二人の尼は涙ぐみて。いたく／＼、さる浮事は身に覺えだに無けれども、この掌の傷は、つゝむ由ありて、年月他人に語る事もあらざりしが、仇々しき事にて、年老いたる尼に濡衣着せ給ふことの、口惜しう思ひますれど、聊か身の上話し仕るべし、其處は端近なれど、此方に入らせ給へとて、客を一間に招じたり。

文林

糸櫻　近衛忠煕

こ蝶さへとまりかねても見ゆる哉
風をすがたのいとざくらかな

行路花　東久世通禧

おもはずも駒ひきとめつ玉ぼこの
道ゆきぶりのはなのこかげに

鍋島直大

さくら花みつゝこねずも一人ゆく
山路はいかにさびしからまし

前田利嗣

いさみゆく駒をとゞめて道のべに
匂ふさくらのはなを見るかな

高崎正風

玉鉾のみちはかどらすこのころは

ゆくところみな花かげにして
前田　利鬯

咲く花のかげゆく道はとほけれど
あしたゆしとも思はざりけり
黒川　眞頼

急ぐべきみちは忘れてさくらぞな
みる人かずにいりにけるかな
小出　粲

とひてこしみちの追分ゆきすぎぬ
並木のはなのかげにうかれて
坂　正臣

霞の上に花の梢見えたる

花かげにたてるを見れど春がすみ
ひとのこゝろに變らざりけり
植松　有經

行路花

こゝよりは車かへしてのどかにも
見つゝやゆかん花のしたみち
內藤　存守

朝まだき山路をゆけどたつとりの
はぶきにちりぬ花の上のつゆ
中島　宜門

初花

昨日かもつれなくみえし松かきの
ひまこそしらめ花やさくらん
林　甕臣

名所春

誰が筆のなげのすさびかうす墨の
ゑしまが崎のはるのあけぼの
上地　信光

行路鶯

きゝすてゝ過ぎなむものか旅人の
往來のをかのうぐひすのこゑ

雨のふる日圖書館に行く路にて

森　馬太

ぬれつゝもなほ見てゆかん春雨に
玉のつゆちるはなさくらばな

伊達淺岡　　佐々　豊水

ゆるぎそめし伊達の大城戸動きなく
築き固めたるこゝろをゝしも

花滿山　　津々良一如

咲きにほふ花にたぐひもあらし山
たゞ白くものかゝるなりけり

行路花　　鍋島　榮子

心ざすかたむかりかはゆくみちも
またおもしろき花のかげかな

前田　朗子

おもふどちかたらひながら行道の
右にひだりにはなさきにけり

小池　道子

道にしてみるべき花もおほかるを
おそくも家をいでにけるかな

松平　健子

さしてゆくかたも忘れて道のべの
花よこゝろのとまりぬるかな

田邊　龍子

かへりにもみんとおもへど上野山
行きすぎがたし花のこのかげ

[illegible]　久子

いそがずも車をおりてたもとほり
行かまくほしき花のかげかな

きのふけふゆくとゆくみち咲花の
見えぬ方なくなりにけるかな

中島歌子

花滿山

高橋直子

心あての松のみどりもわかぬまで
やままた山ははなざかりなり

詠花歌

藤井行麿

櫻花四方にさきたり時はもよ今こそよけれ
雨ふらず風ふかぬとに日の本のはるの光と
言かよふ外國人に此處彼處みせて誇らな
いひてほこらな

船路の記（つゞき）

故人藪氏

朔日、とくより立ちて、けふは明石に至る。道のほどに、人丸大明神の社ありと、石たてり。拜したてまつらまほしく、よこぎり行けむ、やがて、むかひに、山松の、ひまもなくたてることろに、やしろあり。友どちの心も、いかならむとおもへむ、拜してのぼらず。いそぎ、浦に出でたり。けふは、てりもせず、くもりもはてず、をちかたは、それかあらぬかと、ほのかに、いひ出でむことの葉もたえて、なみ居つゝ詠むるに、ふるさと人も、いと戀ひしう、小石、いさごなむど、とるも、せめて、家つとにせむ手すさみなりや。松かねにゐよりて、日を送らまほしく、おもふなり。いさごのつもりて、高くなりたるなれは、雨風にすられ落ちて、松がねは、高くすきて、よそにみぬさまに、うら

のみるめも立ちそひ、いとたえぬこゝちを、なぐさめむにものなし。

人とはゞ何とおかしの浦とほく
おみもなぎたるけふの海原

淡路島、むかひに見ゆ。一里といへど、舟人のものいふもきこえて、遠からず、おもひわたりぬ。枝さしかはし、立ちつゞく松の下浪、みやらるゝは、すまのかたなり。

行末は松のみどりにうづもれて
みるめゆかしきうらの通路

山より瀧の音して、水の流れて海に入るもあり。浦さびまさる磯邊を、つたひ〳〵て行く。

いかならむうら山松の濱つたひ
明石の秋の夜半のつきかげ

など、いひ〳〵て、行くかたをわすれたり。また、をのこの、ひとりずさぐして來れるあり。同じところに、やすらひてながめ居ぬ。やがて、物いひかはし、いづくよりぞとゝへば、日の向の國よりとこたふ。我は日のうしろの國より來りて、けふもろともに、明石の浦をみむとはなぞ、打ちかたらひて、時うつれど、彼の人は、舟に乘りて、須磨の方へ行くとてわかれぬ。舟をまねけど、舟よりもまねきて、しばしがほどみつるに、島かくれてみねずなりにけり。ゆくさきに、日向大明神の社あり。しほみつ、しほひるの玉をさゝげ給ひし、住吉の神にぞ、ましく〳〵けるとかや。道のゆん手に、高き所に石の塔あり。
仲哀天皇のみさゝぎといへり。拜し奉りぬ。

いにしへの照日隠れし里とへぞ
　いまは涙のたるみとぞいふ

うしろに山あり。千壺とて、いにしへは、山の姿に、壺をいけて、はちすをうゑしとぞ。いたゞきのひとつの壺に、水をそゝげど、すその壺まで、水のかゝりけりとぞ。この故に、さとの名の、たるみともいへるならむか。文字をしらねど、さだかなること、しれがたし。今は壺のみのこりて、蓮はたえしとぞ。壺のかけたるをひろへど、たゞりありとて、ちかづかずといひ傳へしとかや。ひそかに思ひみれど、この山のいたゞきこそ、みささぎあらんか。須磨にかゝれば、山高くして、三の谷より、二、一の谷におよぶ。人〳〵、むかしのふるごと、おほくつげあへり。むね せまくおぼえて、心ぐるし。行き過ぎぬれど、山路のぼりくだりぬ。海すこしへだゝりて、松のひま〳〵より見ゆ。

波の音もまつの嵐も吹きたへて
　浦さびまさる須磨のやま道

須磨の關屋のあとは、なとり河のほとりとなんききし。今ははつかの流ありて、石の橋かゝれり。左のかたに、かすかなる草の屋あり。

今はたゞ名のみとゞめて須磨浦の
　關屋いづくといふ人もなし

此夕、兵庫にやどる。

（つゞく）

雜報

●殘りの花　昨日まで盛と見てし上野角田の櫻の花も、うちつゞきし春雨に、やうやう、色あせて、今は、大方うつろひぬ。されど、松杉の木蔭におはれ、物のはざまにたてる木どもは、今を盛りと咲きいでたるもあり。心ある人々は、大方の盛りなりし折よりも、見に行くものも少くて、中中に心しづけしとて、ことさらに殘りの花を尋ぬるもありとか。あはれ、世の女等。うまれつき、才かしこく、智識秀で丶、一ッを聞きて、十を知り、學び習へる事ども、人にたちまさりて、いち早く成しいでむは、まことに得難くめでたきことの限りにはあれど、これに引き替へて、心おろかに、才鈍く生まれいで、何事も、人に後れがちなる女等よ。たとひ、その愚なる事を知りぬとも、いたづらに、身を要なき物と思ひなし、みづから棄つることをなせそ。性質なればとて矯むることを得ぬものにもあらず。たゞ、その學び習へらむ事どもを、心にかけて勞み勉め、かくて、聊も怠らざるときは、遂にその事を成し就げ得て、後れても、花さく春に逢ひぬべし。世には、殘りの花愛づる人も、いと多かり。外のちりなむ後の花、中々に見所あり。必、みづから棄つべからず。古の人も、かくは詠みおきつるものを。

ちり果て丶、又咲く花も、ありければ

人におくるゝ、身をも恨みに

●菜洗ふ少女　或日の夕つ方、小石川のわたりを過ぎぬ。一人の少女あり。頭には、手拭を冠り、肩には手繦を掛け、裳かゝげて、小川の中に入りたちつゝ、菜洗ふめり。父母が夕食の物とゝのふるなるべし。折しも、向ひの岸を通りかゝれる三人の女、花見の歸さにもやありけむ。いときらびやかなる今樣の身なりして、手毎に花の折枝を携へたるが、花見の塲の遊戯にやつかれけむ。足は、いと重げなるに、何くれと、高やかに、うち語らひつゝ、ねりありく。いかなる家の令嬢等にか。川中の少女が見つけたらむには、いかばかりか、心うらやましかりなむ。さるにても、貧しき人の憐さよなど思ひ續けつゝ、行くに、三人の女は、岸邊によりきて、芝の上に、やをら、腰うちかけぬ。さては、足のつかれをいこへむが爲なるべしと思ひし程に、やがて、一人は、はゝゑみつゝ、川中の少女に指さしぬ。二人の眼も、そなたざまに注ぐとひとしく、大聲あげて笑ひいでたり。うち驚きて見あげつゝ、顏赤らめし賤の女が心、いかゞはありけむ。三人は、猶も笑ひ興じつゝ、立ち去りぬ。さても、この女等は、何事をか笑ひし。そのありさまをみにくしとにか。そのする業を賤しとにか。食物とゝのふるは、女の常のわざにして、貧しき人は、世の中の、最も憐むべきものなりかし。かうやうなる女等は　いまだ、物事の道理をも辨へず、又、父母の爲に、みづから、衣食の勞を取りしことなきものなるべし。もし、誠の

心ありなむには、この賤の女を見るにつけても、ますく、父母の恩を思ひ、その身の怠りを耻ぢ思ふべきに。

●悟りたる女　水汲み米とぐ業はいやし。これ、婢女のすることなり。飯炊ぎ物煮るわざもいやし。これ、雇はれ人のすることなり。新に裁ち縫ふとならで、衣服も手にせむ。ほころびを縫ひ、破れをつゞるなどは、又いやし。まして、汚れたらむ物洗ふは、いとくきたなし。箒もたで、髪に、塵かゝらむ。雑巾もたで、手穢れねべし」と、手繦を脱して、羽織を着、前垂を取りて袴を穿ち、手繦を斷ち、前垂を裂きて嘆じて曰はく、「嗚呼、我、固陋學者の爲に誤られて、賤しき業を事とし、ほとく、その身を、婢女とし、雇はれ人とも了らむとせり。父よ。母よ。さては、我が夫よ。妾は、今日より、改めて、その心意を高尚にし、その風采を優美にせむとす」と。悟りたる哉。この女。さるにても、此等の事をいやしとせば、人の子、人の妻たるものゝすべき業は、果して何事ぞ。優美と高尚とは、するわざの賤しと否ざるとにはよらざるものを。當世の悟れるものは、大方この類なり。噫。

●おことわり　餘芳に、星月夜物語のつゞきをかゝぐべく約しおきつれど、記者、こたび、にはかに旅行したるため、又々この號にも、のすことをえず。あしくな咎めたまひそ。

五月兼題

- 五日
  - 歌　夘花
  - 文　學校の事を記す
- 廿日
  - 歌　深夜郭公
  - 文　五月雨

教の庭

四月二十日兼題　野雲雀

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　京都府愛宕郡上賀茂村　南大路芳枝

みなひとの心もそらにうきたちて
雲雀なく野はのどけかりけり

地　府下麹町區下二番町　中村友子

はるの野に菫つみよと來て見れば
空はひばりのこゑばかりして

人　愛媛縣伊豫郡郡中村　武智卓能子

すみれさく野邊見にくれば久方の
雲井はるかにひばりなくなり

うら〳〵と菫咲く野はくれながら　高井繁子
猶こゑのこるゆふひばりかな

あがりても落つる雲雀は春の野の　平山ゆふ子
菫のとこやわすれかぬらん

春日野のすみれの床をよそにして　河野文子
くもゐはるかに雲雀なくなり

聲ばかりそらにきこえて春の野に　千々波橘子
すがたも見えず雲雀なくなり

春の野のかすみもふかき夕ぐれに　山田先子

いつこともなく鳴く雲雀かな

おしなべて霞こめたるむさし野に　藤澤元子
聲のみ落つるゆふひばりかな

春の野のすみれの床をなつかしみ　高橋政子
そらにあがらで雲雀なくなり

かすみたつ末野に落つる夕ひばり　狩野秀子
芝生のとこやこひしかるらん

春の野の芝生をはなれおほぞらの　堀内安子
かすみの中になくひばりかな

かげろふのもゆるはる野に菫つみ　溝口奈保子
落つるひばりの聲をきくかな

雲雀なく聲はくもまにきこえしが　靑木辰子
いつしか落つる野邊の千草に

春日野のかすみの空よなきくらし　内田慶子
ねぐらにかへる夕ひばりかな

春日野のすみれの床を志たひつゝ　佐々有鄰子
おつる雲雀のこゑぞかすめる

はるがすみたなびく野邊の夕雲雀　永島いくの
今やおつらんこゑちかづきぬ

春日野の雲井もたかくひばりなく　花山やすゑ
こゑもはるかに聞えけるかな

かすが野の草の床をばあくがれて　花山きのと

大ぞらたかくひばりなくなり

菫ヾなはてなく咲けるゆふ日野の　のどけき空にひばりなくなり　植田貞子

かすがののかすめる空に風もなく　聲のどかなるゆふひばりかな　稲田晴江

野邊になく百鳥の音にまがへじと　かすみと共にたつひばりかな　稲田君子

ながき日に翼やすむるひまもなく　飛ぶ日の野邊に雲雀なくなり　瀨戸さと子

うすがのゝ霞のおくにきゑはてゝ　雲井はるかになくひばりかな　新野尾喜起

うら/\と霞める野邊を分行けば　菫のとこになくひばりかな　高橋直子

咲けばちるのべの櫻やいとふらん　なか空にのみひばりなくなり　小杉浪子

春がすみたち出で見れば武藏野の　すみれの床にひばりなくなり　眞崎淑子

菫つむをとめに野邊をしめられて　かすみの空にひばりなくなり　足利世根子

野にいでゝ見れば雲間になく雲雀　おちても見ゑぬ夕ぐれのそら　江馬信子

淺みどり空もひとつのはるの野に　あがる雲雀のこゑぞきこゆる　植木鋼子

おもしろき雲雀の聲にあくがれて　暮るゝも知らず野邊に暮しつ　川井田さよ

みやこ人いとめづらしく習志野の　雲井はるかにひばり鳴くなり　楢崎光子

昔人のあくがれいづるはるの野の　赤尾たま子

かすみがくれに雲雀なくなり

とぶ火野の芝生の床をしむるのみ　雲雀はそらにこゑばかりして　淡海香女子

春の日のつばなぬく野に少女等の　そでの下よりたつひばりかな　中村香女子

遠近のかすみのなかにこゑはして　つばさは見ゑぬ夕ひばりかな　里吉照子

ひねもすに霞に消ゑてなくひばり　雲井のそらにこゑばかりして　里吉孤子

のどかさと片野の原をながむれば　雲井はるかにひばりなくなり　津金菊子

うちなびく霞のうへのくも井まで　聲もはるかになくひばりかな　山田瑋子

萌えいづる野邊の小草の深みどり　のどけき空にひばりなくなり　矢島婦爾子

さきにほふすみれの花に舞ふ蝶も　歌ふひばりの野にあればこそ　狹原定子

みわたしの限り知られぬ武藏野に　數もしられずなくひばりかな　勝家貞子

子をよばふ歌野の雲雀きくたびに　よになき母のしのばるゝかな　佐藤秋子

かすみたつ歌野の雲雀日ねもすに　聲ぞきこゆるかげは見ゑねど　廣岡とよ子

雲にいりかすみに消ゑてゆふ雲雀　こゑのみぞきくむさしのゝ原　押尾菊子

我が子をも忘れやすると思ふまで　雲井にたかくひばりなくなり　高橋たか子

うら/\と霞める野邊に或は落ち　本田静代

或はあがりてひばりなくなり　南大路素子

昔人はおりたちあそぶはるの野に　ひとりあがりてなく雲雀かな　南大路正子

おりたちし人はかへりて春の野の　草にはなかぬゆふひばりかな　福木いね子

はるの野の菫つみにと來て見れば　其處ともわかず雲雀なくなり　小山和賀子

菫さくのべのひなをやおもふらん　こゝろも空にひばりなくなり　栗本糸子

雲わけてあがるひばりも春の野の　ねぐら忘れぬものにざりける　松井たまみ

すみれ咲くのべの細道分けくれば　袖のしたよりひばりたつなり　大塚圓子

うら〳〵と眺めもあかぬ武藏野の　霞のおくにひばりなくなり　堀みさを

武藏野の雲井はるかになくひばり　すみれの床やこひしかるらん　堀絲子

大君の御代の春べにうたひでゝ　くもゐに近くなくや野ひばり　德永もみ子

子すだちの小野の床をや忘れけん　ひばりの聲はそらよのみして　船田りう子

空たかくあがるひばりは春の野の　わが行く先をしたひてやなく　大亦隆子

大空のこゝろをしるべにいでしかど　いつか影さへおちし野ひばり　佐藤敬子

野邊路にぬるゝ床よりあがり行く　ひばりも空につばさほすらん　中村備子

久方のくも井をさしてとびあがる　ひばりなく野の春ののどけさ　廣田とめ子

春ながらわきてのどけき朝ぼらけ　すだちの小野になく雲雀かな　松田靜枝

聲するはあはれ雲雀のひなならむ　はゝこさく野に父と呼びつゝ　松田いし子

夕雲雀矢よりもはやくおち來なり　ゆみはり月の目にやふれけん　松田もと子

春景色ひとりしめのゝゆふひばり　なれしかすみの奥にきえゆく　橋本數江子

たゆみなく野邊の糸遊くりかへし　春の日ながくひばりなくなり　碓井信子

のどかなる空にさへづる雲雀かな　芝生のところをよそにおしつゝ　碓井たけ子

野邊見れば霞のうちにうら〳〵と　のぼるひばりの影ものどけし

四月廿日兼題　山吹の花を贈る詞

天

愛知縣名古屋市南久屋町　赤尾　玉子

あやなく咲くぞといはんもかひなしや君こずて花はさきけり山吹の口なしいろをいかにかもせんあはれ此花の露にきはひ雨に脳めるさまよ妹にまるといひけんもうべなりげにをる人の多きもうしろめたく心なき雨かぜにうつろはんもくるしきまけさよりふりそゝぎて玉をぬきとめたるがいみじうあはれなれどうつろはぬまに一枝たをらむやとてぬれつゝもしひてをりつる心つくしい

はで思ふ花のいろたれにか見せ侍らんあなかしこ

地

北海道渡島國檜山郡江差港九艘川町　足利世根子

櫻の花も散り鶯の聲も老ぬる此頃のさびしさは御身も我もおなじ思になん侍るそを慰さめんとてか我庭の垣根に八重一重打交りえもいはれぬ匂ひに咲出でたる山吹を春のなごりの花とおもへば妹に似る草とはいへ我獨り占てたのしむもいと惜く思ひ侍りぬ又口なしの物いはぬ色に咲たれど花の心は大方の人に愛でられんこそ本意なれと推量りて蕾多き一枝二枝を手折て御身にも分つとゝはなしぬされば賤もなき花なれど黃金にもまさる贈物とおぼして眺められなむ我がよろこびはいふも更なり花も面おこしつべし

人

府下麹町區下二番町　中村友子

さゝやかなる前栽には手植し山吹の花の今年はいみじう盛に咲き亂れたれば一枝贈りまゐらすにはなん床の間にかざし玉ひてつれ〴〵の折のなぐさめ草になし玉はゞ此上なきよろこびにこそ世の中の人の自ら黃金の色に迷ふなるを顧みずして山吹の花の一色を色々にさげすむは如何あらん花若し靈あらむいと口惜しく思ふなるべしされど七重八重目もあやに咲きにほふ花に實の一つだになきこそいともかなしくあかぬことなれあはれ今の世の中にあだし言葉の花をにほはせてあらきものの心の實なき人の多きこそいとなげかはしき事になん

佐々有鄰子

七重八重今をさかりに黃金をのべてつくれる花かとうたがふばかりの色になもありける此の一枝を小かめにさしてみそなはし露のなさけをかけたまはゞ花はおもておこしつべくわらはが心も一しほにこそ春ふかきすがたを逝水の波のそこにもうつしあさからぬにほひを賤がはいりのそで垣にも咲ををり百のこびをそへ万のながめをくはへていともゆかしくなづかしき山吹にならはましものをとけいし奉るなり

矢島婦爾子

此の頃は如何にすごさせたまふにかさぞ山邊の霞に御こゝろひかれさせ給ふらんかつ御庭の花もさかりまこそその御目うつしには何ばかりのにほひもはべらざらめどこの頃よりわれしりがほにまがきの山吹さきそめ黃金ちりしく玉の床もかくやとおもふほど汀のすがた何となうゆかしうなんされむひとりたのしまんもいかゞと二三枝手折りてまゐらするになん井手にはあらずもわが庭のこゝろやりと御覽せさせたまはんにはいと嬉しうなん

南大路素子

くれかゝる春の空こと木の花はちりも殘らず霞のいろもおのづからうすらぐ比しも獨り匂へる山吹の花朝な〳〵露おもげなるさま優にやさしく櫻すみれになれたる目にも何となくもてはやされつ殊更にこの花はしも春の名殘と思へばあはれさもはたなつかしさも一入にわれのみめでんは心なきわざと一枝折りて贈りまゐらすちりやすき花にしあ

ればそをかへりみ玉へとの心にあらずまた實なき花となり玉ひその諷にもあらずかしあなかしこ

小山わか子

あかぬ梢もちからなくちりみだれたる花のうちちより露おもげに咲出たる山吹の春のなごりもさだかに打すてがたくて一枝まゐらするをお前のかめにさしそへ給はゞ如何ばかりかうれしからん

ものいはぬ色にはへどうれしさは
ひとへにまさる山吹の花

花に似てみなき言の葉をさへにそへたるもいとをこかましとやおぼし給はむかし

松田靜枝

都の錦あせはてゝ暮れかた惜しき春の餘波に物やさしう咲き出しこの花井手の玉川のものにしあらむ匂ひも左こそと思ひ侍れど生憎に拾ておきし庭の面に小草もろとも生ひいでしものことに賞のなき此の花の一枝にあはれ賞のなき筆の跡をも取り添へてまゐらすると七重に八重に恥かしうころ

碓井信子

春のけしきいたらぬ隈なく千々の花も今を盛りと咲そろひつる頃をいかにすごさせ給ふらん此山吹は父のこのみて日毎に土かひ水やりなどをこたらずおはしたてつるげにや昨年より黄金の色をそへかつ早く咲いで侍れど唯ひとり詠めんもいと口をしうおぼえぬれど二枝三枝手折て小女にもたせまゐらするをあはれ御花瓶の料にもなし給はゞ妾のみか心なき此花にとりていかばかりうれしうなんあなかしこ

延着

野雲雀

ゆけばゆく空にきこえて武藏野は
雲雀のこゑもはてなかりけり　田村千代子

くもるをばいとふ習ひか春の野の
霞めるそらにひばりなくなり　佐藤みゆき

かすみたつ遠里小野のゆふひばり
己がねぐらはいづこなるらむ　須山美子

賤の男が鍬かたげゆくはるの野の
かすめる空にひばりなくなり　須山規矩子

見渡せばすみれさく野の末とほみ
こゑものどかに雀雲なくなり　須山倭文子

朝雨の晴れし野すゑののどけさは
おほ空たかくひばりなくなり　大和嵜子

山吹の花を贈る詞

田村千代子

今はむかし太田のなにがしといへる人のかりに出たるに俄に雨ふり出ければ柴のいほりに立よりてみのからんといひいれけるに山吹の花を折て「みのひとつだになきぞ悲しき」と口にはいはで心にほのめかしぬとこそきゝしかそれにはあらで庭の山吹今をさかりと花咲出で朝ゝは露になびき夕には月をやどせるさまいと〳〵をかしかれど二枝三枝をりとりて御もとにおくり參らすになむ花瓶のなかばを分ち賜はゞ花もこよなき幸と思ふなるべしされどけふは物はのめかすにはあらねどわが言の葉のたらはぬふしを補ひて御心をなぐさめてよといひをしへてさておもへば昔人もこは口なしの花とこそいひ侍りけれあなかしこ

女鑑自第壹號至第三十六號目次

皇后宮御製　謹
祝詞　東久世通禧（一）
同　西村茂樹（一）
同　土方久元夫人（一）
同　高島鞆之助夫人（一）
同　何禮之夫人（一）
同　土岐頵德夫人（一）
同　長瀨時衡夫人（一）
同　三木敎子（一）

○女鑑

發行の趣意（一）
女子敎育論（其一、其二、其三）（一、七、九）
尋常中學に女子部を設くべし（二）
女子敎育の要旨（三）
母のつとめ（四）
女子敎育の基礎（五）
歳旦の辞（六）
初雪を見て感あり（七）
愼みてな怠りそ（八）
百年の苦樂他人にあり氏なくして瑤輿に乘る（一〇）
女子の敎育は家庭敎育の根底なり（一一）
高きに登るものは卑きよりす（一二）
和漢女訓辨（一五、一六、一八、）
我と云ふ感念は女子にも亦必要なり（一七、一八）
女子の交際（一九）
女子の品位（二〇）
本邦婦人の公義心（二一）
守る所を失ふ勿れ（二二）
世の諸嬢に告ぐ（二三）
苟もする勿れ（二四）
婦女と繪入新聞及び卑猥の小說（二五）
女敎小言（二六）
敎育は人事の母なり（二七）
母姉の責任（二八）
歳暮の辞（二九）
新年の辞（三〇）
婦道の起源（三一）
誠敬は道義の根本（三二）

遜讓は禮の本　（三三）
內外表裏の別　（三四）
卑弱下人　（三五）
女子の五德　（三六）

○論説

婦女の職守　岩下方平　（一）
婦女の道德　大關克　（一）
女子社會に望む　落合直文　（二、三）
男女の差別　武谷水城　（二、三）
大祭祝日の儀式　小中村義象　（三）
戀歌といふもの　落合直文　（四）
婦人の美　菅喜田和三郎　（五）
婦女職守の範圍　三橋要也　（五）
女子敎育所感　檜垣直右　（六）
國体と歌道　關以雄　（六）
女權の定義　武谷水城　（六、七）
婦女の愼むべき事を論ず　關以雄　（七）
女子の風は茶事の如くなるへし　土子金四郎　（八）
女子の本分　椿蓁一郎　（八）
女子の美質　岩下方平　（九）
婦女子に告く　高嶋平三郎　（九）
男女の尊卑　武谷水城　（一〇）
先嫉妬を去れ　伊藤武壽　（一〇）
女子は宜しく簿記を學ぶべし　土子金四郎　（一〇）
忠義は男子の專有にあらず　關以雄　（一一）
女子高等師範學校卒業諸子に告く　椿蓁一郎　（一二、一三）
女子宜しく德本を養ふべし　前川弘一郎　（一二）
女敎師諸君に謹告す　多田房之輔　（一三、一四）
歌の德　藤井行麿　（一四）
女子の忠　細川潤次郎　（一五）
小學敎育上敎師の價值　椿蓁一郎　（一五）
女子敎育の要旨　高津鍬三郎　（一六）
婦人の位置及び婚姻の倫理に就て歷史上の話　三上參次　（一六、一七）
所謂自由結婚の弊　武谷水城　（一七、一八）
女子の至尊とは何ぞ　前川弘一郎　（一八）
女子に專制の義なし　岩下方平　（一九）
衣縫孝女の傳を讀みて所思を述ぶ　伊藤武壽　（一九）
女子敎育につきて　椿蓁一郎　（二〇）

百人一首につきて　井口隆太郎（二〇）
女子獨立の辨　武谷水城（二一、二二）
女子は何の爲に學をなすや　三輪田眞佐子（二一、二二）
婦行の要　岩下方平（二三）
單に家政敎育を以て女學校の本分となすは誤なり　土子金四郎（二三）
本邦の婦女は如何なる點を矯正すへき乎　三輪田眞佐子（二三）
女子は敎師たる資格を備へざるべからず　杉谷正隆（二四）
婦女敎育退步の徵あり　三輪田眞佐子（二四、二五）
家庭敎育の必要　高津鍬三郎（二五）
女子獨立の一害　武谷水城（二六、二七）
女子要言　三輪田眞佐子
第一篇緒言（二六、二七）
第二篇女子本來（二八）
女德（二九、三一、三二、三三）
女子特別の身分（三四、三五、三六）
羮に懲りて膾を吹く論　棚橋絢子（二六）
德本才末　岩下方平（二八）
女子敎育の妨害を排す　細川潤次郎（二九）
母のをしへ　秦政次郎（二九、三〇）
女子中等敎育に就きて　細川潤次郎（三〇）
女德の衰敗を歎く　大林弘一郎（三一）
阿婉の傳を讀みて　伊藤武壽（三二）
惟神の婦道　久米幹文（三三）
自得會席上白鹿洞書院の揭示を說明す　棚橋絢子（三三）
玉磨かざれば光なし　細川潤次郎（三四）
女子四期の心得　大林弘一郎（三五、三六）
琴活花の精神を學ぶべし　土子金四郎（三六）
〇史談
木華咲夜姫命の事を記し奉る　菅喜田和三郎（一）
馬飼歌依の妻の事を記す　三橋要也（一）
孝女幸の行實を記す　井上頼文（一、三）
弟橘媛命の傳　佐伯有義（三）
橘逸勢の女の傳　井口隆太郎（三）
烈女藤子の傳　鬼頭少山（三、四）
上毛野形名夫人の事を記す　三橋要也（四）
引田部の赤猪子が事　三木五百枝（五）
すて女の傳　片岡正占（五）

弟媛の事を記す　長屋基彥（六）
節女お政の傳　吉田良春（六）
忍坂大中媛命の事を記し奉る　長屋基彥（七）
松田助八が娘さつ女の事　竹野節雄（自七至九）
在原業平の妻の傳　井口隆太郎（八）
天暦の女御宣耀殿の御事　三木五百枝（九）
草香幡梭媛の御事　三橋要也（一〇）
漁商佐左衛門の妻糸女の事　片岡正占（一〇）
贈正五位野村望東子の畧傳　武谷水城（一一）
烈婦はつ女の傳　井上賴文（一一 一二）
黒井紫乃の事を記す　竹野節雄（一二）
人道今古が事　三橋要也（一三）
忠節つな女の事　片岡正占（一三）
阿佛尼　三木五百枝（一四）
孝婦つやが事　佐々豐水（一四）
松浦佐用姫　竹野節雄（一五）
孝女きそが事　片岡正占（一五）
堀越後守忠俊の後室　竹野節雄（一六）
忠義者つやが事　片岡正占（一六）
小楠公の母　三木五百枝（一七）
松下禪尼　藍村秀（一七）
靜の傳　井口隆太郎（一八）
塚本みさが事　松野操雄（一八）
袈裟御前　松野操雄（一九）
孝女つちが事　片岡正占（一九）
朽綱鶴子の小傳　尾石美豆紀（二〇）
貞節かつが事　片岡正占（二〇）
和氣廣蟲の傳　三木五百枝（二一）
孝女つやが事　片岡正占（二一）
春日局　三木五百枝（二二）
孝女てうが事　片岡正占（二二 二三）
細川忠興の夫人　竹野節雄（二三）
山内一豐夫人若宮氏の傳　細川潤次郎（自二四至二七）
孝女かんの行實　井上賴文（二四）
津崎村岡の傳　竹野節雄（二五）
豐太閤の北の方　小野利三郎（二六）
瓜生保の母　小野利三郎（二七）
堀部金丸の女幸の傳　松野操雄（二八）

孝女いち兄弟が事　倉持治休（二八）
北條時頼の母　竹野節雄（二九）
河瀬波留子の傳　松野操雄（二九）
神功皇后の御傳　三木五百枝（三〇）
女丈夫阿婉の傳　尾崎禮牟子（三〇）
松尾多勢子傳　三輪田眞佐子（三一）
奇特者せんが事　片岡正占（三一）
土肥實平が妻　三橋要也（三二）
梯孝婦の傳　宮本好風（三二）
佐竹侯の婦人の事　三木五百枝（三三）
おとめが事　柴田龜太郎（三三）
淺岡　小野利三郎（三四）
孝女そよろが事　片岡正占（三四）
德川吉宗の母巨勢氏　小野利三郎（三五）
丹波國の孝女　三浦千春（三五）
鈴木宇右衛門の妻　田島利三郎（三六）
孝女たけが事　片岡正占（三六）

○家　政

育兒小言　武谷水城
總論（自一至九）
懷妊の間の心得方（一〇）
分娩後の心得方（一一）
乳養の事（一二）
乳母並に傅婢の事（一三）
斷乳の事及び他の食物に慣れしむる事、衣服の事（一五）
沐浴の事（一六）
睡眠の事（一七）
空氣に觸れしむる事、及び運動の事（一八）
小兒病氣の時の心得方（二〇）
種痘の事（二一）
小兒の心の發達並に五官の開能の事（二二）
心性の發達を幇助する事（二四）
遊嬉の事、並に玩具の事（二六）
言語の敎方の事（二七）
敎導方の事（二八）
訓誡の事（二九）
賞罰の事、並に獎勵の事（三一）

女禮式　有住齊

緒言（一）
片障子開閉樣
手水掛け樣
掛物掛け樣
簾出入り樣

幕出入り様　幌出入り様
小袖衿着せ様　主客心得様
掛物見様　瓶花見様
懸物結方（圖入）　書籍卷物見様（圖入）（二）
扇つかひ様　物品進撤の心得
烟草盆出し様　茶出し様
火鉢出し様又炭置やう　燭臺出し様附心取り様
手燭持出し様　小刀出し様（三）
扇子出し様
琵琶出し様　箏出し様
笙出し様　笛出し様
尺八出し様　大小鼓出し様
大鼓出し様　碁盤出し様
將棊盤出し様　硯箱料紙出し様
書狀授受様　同披露
目錄授受様　同披露の仕様（四）
手熨斗拜領　辭令書拜領
同渡し様　目錄類拜領
衣裝類拜領（五）
供饌式　熨斗鮑三方出し様
一人に本、二、三の膳出し様　片側列座膳出し様
兩側列座膳出し様　上座歸り膳出し様
千鳥掛膳出し様　燒物出し様（六）
臺引出し様
飯鉢出し様付壺下げ様　汁盛替出し様
盃臺出し様　中酒出し様
吸物出し様（七）
肴出し様　湯出し様
水出し様　菓子出し様
濃茶出し様　薄茶出し様
行酒飲食程式　上盤盃の受け様付返進様
同様盃指し様付受け様　下盤に盃さし様付受け様（八）
肴挾み様　同受け様
銚子提子披き酌取り様　同結び酌取り様
同別れ酌取り様　小流れ酌取り様
大流れ酌取り様　瓶子酌取り様
燗鍋酌取り様（九）
神酒いたゞき様の事　飯食ひ様（一〇）
飯食ひ様禁忌の條　餅菓子食ひ様
干菓子食ひ様　茶飲み様
赤飯強飯食ひ様　楊子つかひ様
陪食心得様（一一）

（完）

家事經濟　宮城四山

緒言（一）
經濟とは何ぞ（三）

家事經濟上主婦たるの心得（四）

茶事の辨　藤井行應
緒言（一）
點茶水屋こしらへの事（圖入）（二）
薄茶四疊半點平手前順序（圖入）（二）
四疊半炭手まへの順（圖入）（三）
濃茶配膳給仕の順（圖入）（五 六）
十會（七）
十興（七 八）
節序田尺、敷松葉並砂雪隱、茶事雜事（九）
茶會のくさ〴〵（自九 至一二）（完）

家內衞生　三笠舍主人
緒言（一）
第一食物（自一 至一〇）
第二飲料（自一〇 至一二）
第三水（自一三 至一六）
第四衣服（自一七 至二二）

婚禮式　有住齊
結納（一二）
嫁支度（一三 一四）
嫁迎、婚姻（一五 一六）
賄遣（圖入）（一七）
聟入、舅入、里披（一八）（完）

產所式　有住齊（一九 二〇）

看護法捷徑　三笠舍主人
緒言（二四）
第一篇、患者の看侍、病室、（二五）
病室の淸氣法（二六）
病室の温度、臥牀、（二七）
患者の執褥及換褥の取扱方（二八）
浴法（二九）
消毒法（三〇）
体温測定法（三一）
脈搏測定法、呼吸測定法（三二）
病者飲食（三三）
病者睡眠（三四）
病者發汗、病者流涎、（三五）
病者咳嗽及嘔吐（三六）

料理法　待月斎
緒言、鳥類（二十一件）（二一 二二）
諸國名產川魚鮓并膾指身の事（十八件）（二二 二三）
諸國魚類鹽漬并醢辛の事（十四件）（二三 二四）
雜種并藥法の事（二十九件）（自二四 至二六）
青物漬樣の事（三十件）（自二六 至二八）

餅團子類の事（十八件）（二八二九）
菓子幷餡類の事（十六件）（三〇三一）
くだもの持たしやう幷育物類（十七件）（三一）
粉類の事（七件）（三二）
酒の類（十七件）（三二三三）
醬酒酢並溜の事（七件）（二四）
味噌納豆の類（五件）（三四三五）
豆腐類麩其外（十一件）（三五三六）
麪類の事（十二件）　庖厨心得（三六）
（完）

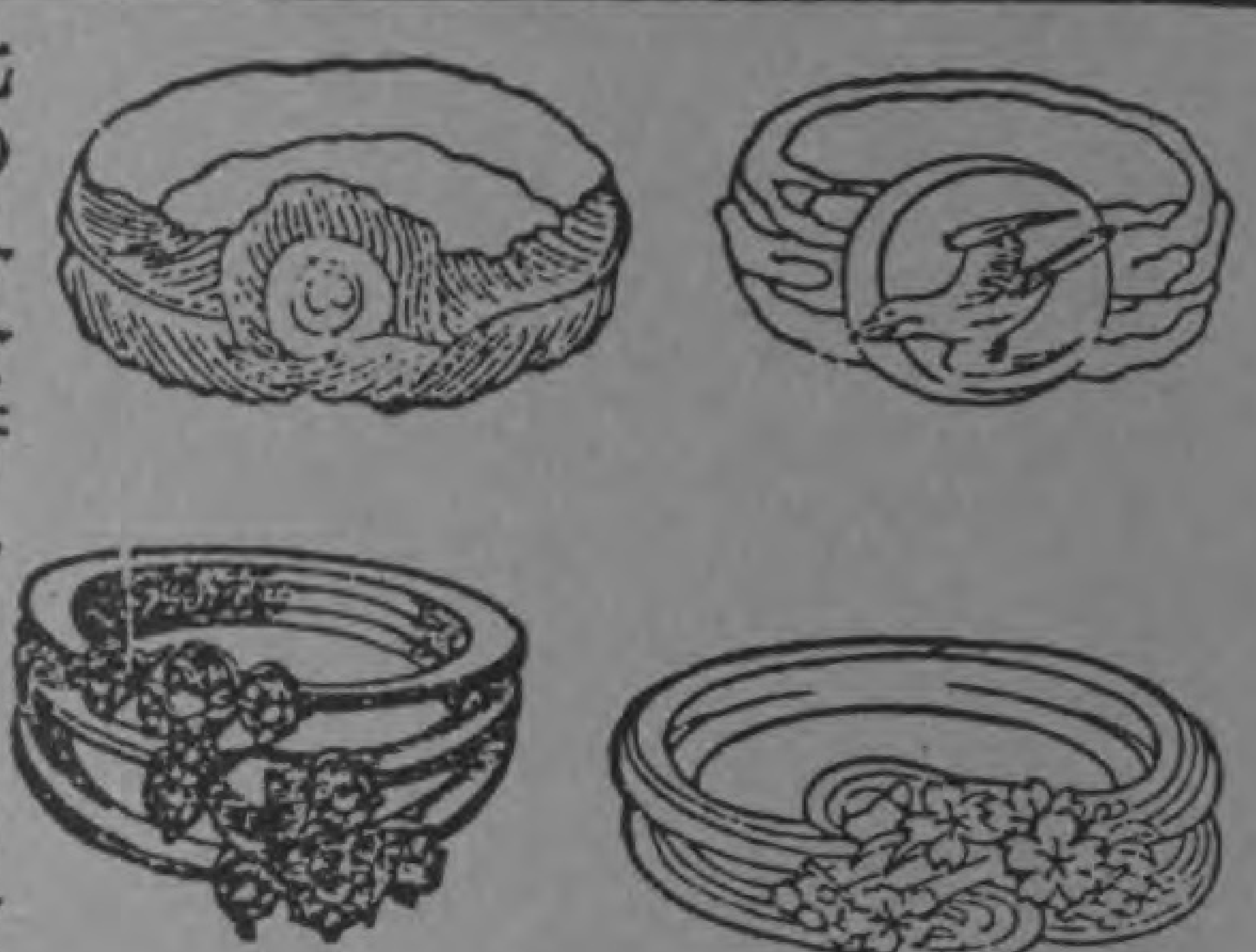
○學　園

和歌のしるべ　井口隆太郎（一二）
緒言、和歌を學ぶ心得、和歌の種類、（自二至四）
裝詞（自五至八）
語學（九）
助辭
（完）

和歌手引草　藤井行麿（一）
緒論

百人一首和歌解　井口隆太郎
天智天皇　持統天皇　柿本人麿　山部赤人
猿丸太夫　中納言家持　安倍仲麿（一）

喜撰法師　小野小町　蟬丸　參議篁
僧正遍照（二）
陽成院　河原左大臣　光孝天皇　中納言行平（三）
在原業平朝臣　藤原敏行朝臣　伊勢　元眞親王
素性法師（四）
文屋康秀　大江千里　菅家　三條右大臣
貞信公　中納言朝忠　源宗行朝臣（五）
凡河内躬恒　壬生忠岑　坂上是則　春道列樹
紀友則（六）
藤原興風　紀貫之　清原深養父　文屋朝康
右近　參議等（七）
平兼盛　壬生忠見　清原元輔　中納言敦忠
中納言朝忠（八）
謙德公　曾根好忠　惠慶法師　源重之
大中臣能宣朝臣　藤原義孝（九）
藤原實方朝臣　藤原道信朝臣　右大將道綱母
儀同三司母　大納言公任　和泉式部　紫式部
大貳三位（一〇）
赤染衞門　小式部內侍　伊勢大輔　淸少納言
左京太夫道雅　權中納言定賴（一一）
相模　大僧正行尊　周防內侍　三條院
能因法師　良暹法師　大納言經信
祐子內親王家紀伊（一二）



金位	純金平打 槌目 又ハ 無地 目方四匁付	三匁付	二匁付
純金	十六圓八十錢	十二圓八十五錢	八圓九十錢
廿二金	十五圓七十八錢	十二圓十三錢五厘	八圓四十九錢
廿金	十四圓五十一錢二厘	十一圓十八錢四厘	七圓八十五錢六厘
十八金	十三圓廿五錢六厘	十圓廿四錢二厘	七圓廿二錢八厘
十六金	十一圓九十八錢	九圓廿八錢五厘	六圓五十九錢
十四金	十圓七十二錢八厘	八圓三十四錢六厘	五圓九十六錢四厘
十二金	九圓四十七錢二厘	七圓四十錢四厘	五圓三十三錢六厘

二十五年十一月十五日調

認印付は前記の外一圓増し篆刻料は一字一圓

此の外金若しくは白金地へ寳石寳玉を装飾したるもの又は種々の彫刻を施したるもの許多有之候間御來車の上現品御一覽下さるか郵便御注文なれば寳石入若しくは彫刻附等の區別を指示し代金御送付あれば其價に相當の品を精撰して調進すべし若し貴意に適はざる時は購求當日より一周間（本店商品中時計に限り三十日）以内は（府外は相當の往復日數を加ふべし）凡そ其物品に破損毀傷なきに於ては何時にても需に應じて他の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かたりとも其爲に手數料若くは割引等を加へざるべし其他の手續は屢々各新聞紙に廣告する所の弊堂店則に詳なり

金縁眼鏡



甲價金十五圓五十錢〇乙十三圓〇丙十一圓〇丁九圓〇戊七圓七十錢〇巳五圓五十錢〇外ニ銀縁五圓〇三圓五十錢〇遞送費金二十錢

右玉は近眼用老眼用とも一々試驗器ヲ照して其度を正格にす、縁は種々あり何れも金性の証明書を附し若其証明ヲ負くことあれば何時にても他品と交換するか又は原價を返戻すると、購求後若し貴意に適はざる時一周間（遠方より御注文の分は往復日數を加ふ）以内は物品の返戻を諾する等の詳細ハ屢々諸新聞紙に廣告する弊堂店則にて御承知あらんことを冀ふ

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

電話番號三百卅三

女鑑第三十六號目次

女鑑

論說 女子の五疾
琴、活花の精神を學べし……土子金四郎
女子四期の心得……大林弘一郎
女子要言第二篇(八)……三輪田眞佐子

史談 鈴木宇右衛門が妻 田島利三郎 ●孝女たけが事 片岡正占

家政 看護法捷徑(十三) 三笠舍主人 ●料理法(十六) 待月恭

學園 文學小傳(承前) 難波津淺香 ●女服考(第十四稿) 有住齊

漫錄 ●女誡和解 內藤燦聚 ●賤居遺文 森馬太 ●村田春海歌がたり 松野操雄 ●齒の堅き人 なゝあ ●上總下總の兩處女 稻園子 ●婦女髮線(圖入) 井上賴文 ●四季の今樣 あゝま
畫師の妻(其六)……江見水蔭

文林 歌 近衛忠熙 ●毛利元德 ●東久世通禧 ●鍋島直大 ●長岡護美 ●高崎正風 ●津輕承昭 ●前田利鬯 ●宮地嚴夫 ●小出粲 ●坂正臣 ●植松有經 ●谷勤 ●內藤存守 ●林甕臣 ●藤井行麿 ●三浦千春 ●佐々豐水 ●有吉秀太 ●鍋島榮子 ●松平健子 ●山田稻子 ●鶴久子 ●尾崎すう子 ●安東菊子 ●千々波橘子 ●三宅三枝子 ●松浦辰男
文 船路の記(承前)……故人 戠 氏

雜報 ●洋服洋食 ●細川氏の演說 ●女子成立學校 ●櫻

敎の庭 歌文 數十首 懸賞歌 數十首

●口繪……小峯邦壽
●挿畫……武內桂舟

(遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收精盛出さす全員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらるゝ方は別に證稱郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿六年四月十九日印刷
同年同月二十日出版

東京麴町區平川町六丁目十二番地
發行兼印刷人 川崎直衞

同 東京麴町區平川町五丁目十六番地
編輯人 山根勇藏

發行所 國光社

國光社印刷部印行